

統一



第百五十四號

明治三十年二月二十四日 第三種郵便物認可
明治四十年十二月十五日(毎月一週十五日)發行

明治三十年二月二十四日 第三種郵便物認可(毎週一週)

目次

十二 篇

敬田供養

立善婦人會講演

日蓮佛祖の史的御批判に就て

宗務廳録事

雜報

敬學財團公告

梶木日種

野老乾爲

森舟寛行



十二、訓育篇
敬田供養

梶木日種

敬田供養といふ題で御話を致しまするが、この題はな
んだか不受不施に縁がありさうに見へませうが、元來
供養といふことに就いては、中古我が日蓮門下に受不
施不受不施の二派が分かれた位な一問題でありまし
て、受不施の身延派が不受不施の池上と争ふ時は、
身延派がこの供養の意義を廣く解して難問を持ち出
し、又た不受不施の悲田派といふ一派では、悲田供養な
ど、稱へて、時の幕府を誤魔化したことがあり、随分
と吾が宗門の歴史上に異様な解釋を仕上げた事柄であ
ります。予は今ま左様なことを御話するのではなく、
恩田、悲田に區別して、茲に敬田たる三寶供養に就い
て述べて見やうと思ふ
そこで佛と法と僧と、この三寶に奉つる供養に就いて
便宜上先づその所施の事物は何であるかといふことを

述べませう、經典には十種供養といふことがある、そ
れは華、香、瓔珞、抹香、塗香、燒香、幡蓋、衣服、
伎樂、合掌の十種であるが、又た

美膳、無量の寶衣、及び諸の臥具、種々の湯藥を以
てし、牛頭栴檀、及び諸の珍寶、以て塔廟を起て、
寶衣を地に布き、斯の如き等の事、以て用て供養
す(法華經、信解品)

園林、浴池、經行、禪窟、衣服、飲食、牀蓐、湯藥、
一切の樂具(分別功德品)

華、香、諸の瓔珞、天衣、衆の伎樂を供養し(全上)
上膳、妙なる衣服、牀臥具足し、百千衆の住處、園
林、諸の浴池、經行及び禪窟、種々に嚴好にす(全上)
華、香、抹香を散じ、須曼、瞻蔔、阿提目多伽の露
油を以て常に之を燃さん(全上)

華、香、瓔珞、抹香、塗香、燒香、幡蓋、伎樂を供
養し、種々の燈、蘇燈油燈、諸の香油燈、蘇摩那華
油燈、瞻蔔華油燈、藥師迦華油燈、優鉢羅華油燈を燃
し、是の如き等の百千種を以て供養せん(陀羅尼品論)

と説かれてあるから、要するに衣食住に關する萬般の事物は、悉皆供養して可いのである。尙ほ手足を以て供給し、一切を以て供養す

とも説かれてあるから、身を以て給使奉公し、一切の事物を以て供養すべきことである。性善の藥王菩薩は、佛の恩と法の恩とに報ゆる爲めに、種々に供養をしたが、尙ほあき足らずして、遂に諸の薰香を服用し、香油を飲み、香油を身に塗り、天の寶衣を身に纏ひて、それに諸の香油を灌ぎかけて、その身を燃して、佛恩法恩の萬一を報じたから、その時佛は、これこそ眞の法を以て供養するものなり、種々の物を以てするとも、假令國城妻子を以て布施するとも、これには及ばじ、これを第一の施と名づく、諸の施の中に於て最尊最上なりと稱讃遊ばしたことがある
又僧には衣、食、臥具、醫藥を以て、四供養と定められてある
日蓮上人に對して、その弟子檀那が献上つた供養物を謂べて見ると、種々な物がある、鳥目、衣服は申すに

と、供養の心得は、かくありたきものである、抑も供養とは、機成ずるとを表す、と釋いてある通り、信仰の上に法悦を得て、喜んで資財を抛つて布施する理であるが、今の世は三寶に對する報恩謝徳、或は有縁の精靈の追善供養とかいふ意義は、薄らいて、只僧侶の讀經回向に對する報酬の如き考を以て振舞ふやうになり、隨て僧侶の方でも報酬の多寡に準じて賣法的に取扱ふやうになつたのは、施す者も受ける者も共に供養の精神を忘れたものである

宗祖の御在世を顧みれば、前記の兵衛志抄にもある如く、報恩的に外護的に四季に渡りて財を供養したもので、又た追福供養とても信者自身に追祐の回向を願み、僧には只僧膳料等の供養を贈くつたものである、一例を舉げれば

米三石送り給ひ候、今一乘妙法蓮華經の御寶前に備へ奉りて、南無妙法蓮華經と只一遍唱へまいらせ候畢ぬ、いとをしみの御子を靈山淨土へ決定無有疑と送りまいらせんがため也(道一八四四)

及ばず、食料としては米、麥、干飯、餅、粽、芋、野老、鹽、味噌、清酒、酢、大豆、さ、げ、大根、牛蒡、昆布、和布、ひじき、摺布、山葵、薑、山椒、茗荷、瓜、茄子、豆腐、菘、筍、柿、梨、栢榴、柑子、柚、栗、海苔、土筆、菓子類、日用品には御器、皿、炭、油、筆、紙、墨、菴の類、或は五明、太刀、馬までも御供養申上げたことが見へる、殊に上人が佐渡身延の沓寒に耐へ難かりし折小袖を得玉ひ、佐渡では紙身延ては鹽の乏しかりし時など、之を得て大に悦び玉ひ、又其折々に供養の功德を常に稱揚遊ばした、或はその功德の勝劣を教へ玉へる節あり

四季にわたりて財を三寶に供養し給ふ、いづれも功徳にならざるはなし、但し時に隨ひて勝劣淺深わかれて候、飢たる人には衣を與へたるよりも、食を與へて候はいま少し功徳まざる、凍へたる人には食を與へて候よりも、衣は又まざる、春夏に小袖を與へて候よりも、秋冬に與へぬれば又功徳一倍なり、これを以て一切は知りぬべし(兵衛志抄)

内房よりの御消息に云く、八月九日父にて候ひし人の百箇日に相當りて候、御布施料に十貫まいらせ候御願文の狀に云く、奉讀 讀 妙法蓮華經一部、奉讀 讀 方便壽量品三十卷、奉讀 讀 自我偈三百卷、奉唱 妙法蓮華經題名五萬返云々
弘安三年女弟子大中臣氏敬白等云々
去の慈父が氏女の南無妙法蓮華經の舞音を聞食して佛に成せ給ふ云々(道一九七一)

この内房の婦人は先考の爲めに自から讀誦唱題して追孝を顯された、又新池殿が米三石送りし時、宗祖は只一暹題目を唱へて、この追善供養に酬られたことが判かる、これを今の世の施主が僧を招いて法要一切を僧に委託し、自己は徒らに來客の接待に難するのと比較したならば、今と昔の信仰に徑庭のある事は實に驚かざるを得ないではないか

次に供養を献げる施主の心得べきことは、第一に三寶の意義を正しく知つて置かねばならぬ、佛と申せばとて阿彌陀佛でも大日如來でも同一とは行かぬ、眞の佛

寶といへば久遠實成の釋迦牟尼如來に限るのである、法といへば、淨土や眞言などの三部經ではない、諸經中王の妙法蓮華經が眞の法寶である、又僧といへば、觀音勢至や大日經の金剛薩埵等を指すのではなく、地涌千界の本化の菩薩こそ、眞の僧寶で、この正法正師の正義を傳へ弘められたる吾が日蓮上人、日什正師等の先師の流を傳へて行く僧侶を指すのである、この眞正の三寶に背くものは、これを謗法の者と名づけ、これを供養することは禁じられてある

夫れ釋迦以前の佛教は、其罪を斬ると雖ども、能忍之以後の經説は、則ち其施を止む、然れば則ち四海萬邦一切の四衆、其惡に施さず、云々(遺三八九)この妙判に、其惡に施さず、と示されたのは、即ち謗法の者に供養することを禁められた明文である、して見れば他宗權門の權佛、權法、權僧には供養してはならぬ

又よしや日蓮門下たりといへども、宗祖の遺訓に乘いて居るならば、是れ亦た供養することは出来ない

は供養する者が清淨な心で施し、受ける者が不淨な心であるのと、供養する者が不淨で、受ける者が清淨なものと、双方が清淨な心であるのと、双方共に不淨なものと、この四通りである、そこで供養する者の不淨な心地といへば、如何なものかといふに

- 一、憍慢の故に施す これは我れより劣つた者すら供養をするから、なんて乃公が負けてたまるものかと、かういふ風な心地で供養をする
- 二、嫉妬の故に施す これは自己が怨み憎んで居る者が、供養を献げて名譽を得、自己より勝ぐれて持難されるを見て、ドーして彼に負けるものか、乃公は彼れより餘計に供養を献げて、屹度彼を負かしてやらうといふ心を以て供養をする
- 三、報を食むが故に施す これは些少な物を供養して、千萬倍の報を得やうとする供養
- 四、名の爲めの故に施す これは彼の人は能く供養を献げる人だ、感心な者だと他人に信用を得やう

適て出家せる者も、佛法を學し謗法の者を責めずして、徒らに遊戯雜談のみして明し暮さん者は、法師の皮を著たる畜生也、法師の名を借りて世を渡り身を養ふといへども、法師となる義は一もなし、法師と云ふ名字をぬすめる盜人也、恥づべし恐るべし、(遺五三〇)と

これは日蓮門下と稱へながら、不情身命、死身弘法の道念なく、本佛釋迦如來の大慈大悲の一大德教を世に傳へて、社會人類を濟度すべき天職を忘却して、徒らに遊戯に耽り雜談に明かし暮すものは、その重罪積りて地獄に墮つべしと、宗祖上人が嚴誡を加へられて居るのである、かゝる法師の皮を著たる畜生、法師の名をぬすめる盜人は、固より供養を受ける資格がないのである

次には供養する人の心地に就いて御話をすれば、涅槃經徳王品には、布施に四種あることが示されてある、それは一には施者清淨受者不淨、二には施者不淨受者清淨、三には施受俱淨、四には二俱不淨である、これ

- が爲めにする供養
 - 五、人を攝せんが爲めの故に施す 乃公がこんなにかゝる結果を得られん理であるから、十分注意せねばならぬ、假令や斯様な卑しい心でなくても、自己の歸依する僧に限ぎつて供養をし、他の僧を疎遠にするやうな仕方は、宜しくないといふ教へられてある、これは固よりさうあるべき筈である、こゝに一ツの事に係る縁事を示さう
- それは摩訶波闍波提といふ釋尊の姨母が、釋尊に供養し献らうと心を込めて、自身手づから華麗い毛氈を紡織なされて佛の臨御を待受けて居られた處が漸うくにして臨御遊ばしたから、喜び勇んで佛院にこれを献上せられると、佛院の仰には、「これは美はしい毛氈である、これは彼處に居る僧共に供養れしなさい」、姨母は、「あいや、これは佛院が出家遊ばしてより、妾が精

神を凝らして手づから繰り揚げ、何卒佛陀に献げ度と、
 樂み暮した供養の品で、誠に粗造なものは御坐いませ
 するが、志を不惑と思召遊ばして、受納下し置かれま
 するやうに」と申し上げられた、その時佛陀は「母が
 専心の供養は悦ばしけれど、恩愛の心にて供養し玉
 はじ、福多からじ、若し彼處の僧共にこれを供養し玉
 はじ、その福彌多し、我れこの事を知る、それ故に
 こそ斯くは勸めるのである」と仰せ遊ばした事がある」
 この恩愛の心は著心である、著心は不淨であるから、
 その福も多くないのである、今の世には随分僧や寺院
 に供養をして、何時までもその供養に着る人があるや
 うに見受けるが、左様な不淨な心があつては、折角と
 功德を積みながら、尙且その福多からずといふ仲間
 に這入る理であるから、これも能く注意せねばな
 らぬことである

又中には供養をしたいと思ひ乍ら、貧窮の身で出来な
 いといふ人もある、斯様な人は隨喜の心を起せよと教
 へられてある、即ち

く送つて来る、處が其處に彷徨ふて居つた女乞丐がこ
 れを見て、つら／＼考へるには、「如斯に供養をする諸
 人は、全く前の世で人の人たる道を修めその分を守つ
 たから、今ではそれ／＼富貴な人と生れ、現に亦この
 通り三寶に布施供養をするから、この衆人の未來は尙
 ほ一層今より富貴な身分に生れる事てがなあらう、そ
 れに引替へ、この自己の身はどうであらうか、前の生
 て少分の福さへも積まなかつたと見へて、今乞丐とま
 て零落して、一飯の食事さへも他の恵を待たずばなら
 ぬ悲惨な状態、かくて此儘功德を積み得ず空しく朽果
 てたならば、未來では尙も劇しき苦患に陥ることは
 必定なり、あなうたてや、かなしや」と正体もなく泣
 き崩れた、丁度その側の芥子の間に錢が二文落ちてあ
 る、そこで女は氣を取り直して兩錢を拾ひ、貰ひもの
 のない時に斯錢で食物を買つて飢を凌がうと思つた、
 ……が併し考へると、假令此錢で買つて食すること
 が出来ても、それは一時限りのこと、その先は又元の
 獸阿彌で、つまりは溝瀆の中へても倒れ込んで餓死せ

若し貧窮の人ありて、財の布施すべきもの無きには、
 佗の施を修するを見る時、而も隨喜の心を生ぜよ、
 隨喜の福報は、施と等しくして異なること無し、と(因
 果經偈)

これは諺に無い袖は振れぬといふてある通り、志はあ
 り乍ら施すべき財物がないならば、供養したくも能な
 いから、左様な人は他人が供養をすることを見た時に
 結構な有難い功德を積ッしやると、心の内に喜べよ、
 さすればその隨喜の福報は、その供養を修めたものと
 少しも異りないぞよと訓へられたのである、なんととい
 と易いことではないか、これならば何人にも出来得
 ないことはないから、他人が供養するを見たならば、
 決して羨やむに及ばない、盛に隨喜の心を起すが宜し
 い
 今一ツ供養の功德と、その心地の注意に就いて故事を
 述べやう

ねばなるまい、して見れば僅か二文の錢なれど、これ
 幸に三寶勝妙の福田に抛ち御供養申上げたなら、當
 來復た佛陀に値遇申す良縁を結ぶことが能きやう、さ
 なり／＼と起き上つて直ぐ多くの僧達の許に駆け付け
 恭しく錢二文を供養した、その時維那の僧が、前み
 出て、咒願をしやうとすると、上座の羅漢はこれを止
 めて、羅漢自から咒願をして、その上乞丐を留めて食
 物を與へたから、他の僧達も感じて皆食を分けて與へ
 た、乞丐は大に歡んで禮を述べてその山を出て樹の下
 に憩み、安心したものと見へてその儘寝入つて仕舞つ
 た、スルと不思議なる哉、供養の徳が顯されて、この
 婦女の色力俄に端正麗麗になり、黃雲顯はれて女の上
 を天蓋の如に覆ふた、處が爾の頃この近國の王の夫人
 が死なられて、後に后になるべき福徳ある女を得たい
 と、王が使を四方に遣はして捜し求めつゝあつた、そ
 の使の者が樹の下に今寝て居るこの女を見ると黃雲が
 上に覆ふてあり服装こそ乞丐の如であるが、却々これ
 は常人でないと思めたから、直ぐ立歸つて王に言上げ

た、そこで相師が来てこの女を占ふて見ると、大夫人の徳が備つてれる、いよ／＼此女こそ后になるべき資格があると定まり、直ぐこの女を沐浴させて衣を更め、千乘萬騎の迎を立て、王宮に連れ歸つた、王はこの夫人に國の政治を任せられると、國豊かに民安く天下太平に治まつた、さてこの夫人は曩に供養せし徳に依つてかくまで幸福な身分に成つたから、報恩の爲めに飲食、衣服、珍寶を車に積み載せて、着園爛山に到り數多の僧にこれを供養した、その時上座の羅漢は繼那に申付けて咒願をさせた、夫人はこれを怪んで言く「前さには僅か南錢を供養す、その時上座自身に咒願をなさつて受けられた、然るに今は珍寶を車に載せて供養致すに、何故繼那に咒願を爲せらるゝや」と、上座の曰く「佛法の中には唯清淨の善心を貴とぶ、珍寶を貴ぶに非らず、夫人先きに南錢を施す時は、善心極めて勝れたり、故に我れ自ら咒願したり、今珍寶を供養し玉ふには貢高の心あり、それ故我れは咒願をせず」と答へ、夫より種々と法を説き聞かせ、夫人も他の多

くの僧も皆初果の悟を得たといふこの故事は、長者の萬燈より貧者の一燈が功德勝れた故事と同一の談であつて、一面供養の福報は廣大なものであることが知れ、又その志の清淨なものと不淨なものとは、如何に功德の上に徑庭があるかということが判かるであらう要するに三寶に對する渴仰信仰の精神が内に充ち満ちて感應利益を享け、そこに歡喜法悦を得、そこに報恩謝徳の念湧き出て、金も寶も家も敵も身も命も甲も乙も惜しくなくなつて、一切合切三寶に供養を献げるといふ意氣になつてこそ、初めて眞正の布施供養の精神を得たものと謂ふことが能る。それに就いて思ひ浮ぶことは、昨年來我が宗門では百年の大計を立て、教學財團を設立されたが、數多き僧侶檀信徒の中には誰か一人、前の話にある王后に成つた乞巧女の如な意氣を起し、又は昨年「信仰の發現」と題して御談をした須達長者の勸化に感じてなけなしの着物一枚を供養に献げて裸体に成つた貧女の如な意氣

を以て、我が教學財團の事業に一美談を貽すものはないであらうか、これは餘り談が極端になりはするが、財團の應募者の中には随分とこれに類似の美談があらうと思はれるから、御心付の仁は報知を願ひ度ものである。尙ほ供養の談に就いては、餘談として信施を受ける佛子の得意を始めとして、徒らに信施を受けてその天職を忘れたものは牛に變生する話や、日連上人が鎌倉殿を牛飼だと諷められた事や、種々の物語を述べたいと思ふが、誌面の都合もあり旁た長談義になるから、今回は以上で擲筆にして置きます。

寄書欄

立善婦人會講演

姫路 野老 乾 爲

本日は第四回目の會合で、新に御入會の方もあり、會員外の御方も御來會下され、琴尺八の合奏、發音器等

の餘興をも寄送されたるは、將來倍々隆盛に趣きますることを卜するに足る次第であります。講演に先立って一寸報告を致します、先月の會に於て水害地へ救濟の事を御相談を致しましたが、速かに御賛成下され感謝に堪ません、即ち其の集りました品物の點數は
合計百三十六點 内譯△單物五十六枚△裕 綿入、丹前、羽織八枚△襦袢十一枚△シャツ十一枚△靴下足袋、ゾボン下、脚絆、股引三十足△前掛九枚△男帶五筋△女帶二筋△洋服、袴、腹掛各一着△金合計
四圓〇五錢
さて世の中に廢物利用と申ことが有まして、此の事は國家經濟の上にも偉大なる利益のあること、信じます廢物利用とは文字の如く廢れたる物の用に立ぬものを工夫して立派に用に立てる事で、極卑近な例を取れば下駄の不用なのを塵溜や河溝等へ捨たものを拾得て齒磨粉の箱を作り、又小兒の玩弄物を拵へたり致しますれば、新たなる柄を使用すると同一の功力がある、東

京杯では悉煙草の殻吹を拾ひ、亦演劇場杯の果た跡掃除を請負ふて竹の皮密柑皮等を集て、一年には何百貫とかありて、夫れて立派に生計を營んで居る、又努力の上にも時間の上にも此の道を利用せねばなりませぬ私の友人に人と對話するに必ず火鉢を引寄せて灰をならして頻りに習字をやる、其れ位時間を大切に心懸ましたから、書は中々立派であります、凡て此の通りて廢物利用は節儉の根本であると云ふ事が五千萬の同胞に意識せられたならば日露の役で二十億の金が費へましても深く憂ふるに足ぬと思はず、御承知の通り我國は日清戦争で東洋の強國となり、日露戦争で世界の強國と成つた、之れを商法家に譬へて言へば、裏店住居から一足飛に極繁華な場所へ出た、けれども間口も狭く店員も少数であつた、次には店を新築して便利の能き様にし、敷も建て店員も不足なく雇入れた、社會の信用を得た、得客も増加した、所て少々不足を感じたのは資本金で、夫れが不充分である、之れが所謂我國現下の實情ではありませんか、世界に比較して軍

事に教育に美術に宗教に殖産に工業に政治に、或部分に一長一短はありませうが、概して劣等には居りませぬ、但し間口が廣がり名望が高くなり交際も廣く生活の度も高まりまするので、以前裏店住居時代の如く米の一升買も出来ぬ、夫れ相應の事をせねばならぬ、隨つて總ての費用も二十倍にもなりて、一年の經費も六億一千萬圓も無くてはならんと申す事て、其大きな臺所を皆様が引受けて居る譯であります、其の名譽を得た替りに責任の重き事を自覺せなければならぬ、そして其責任を盡さなければなりません、其責任を盡すには先づ自己を知らねばならぬ、ドー知るかと思ふに、智識の程度は如何、德行は如何、宗教信仰の狀態は如何、家庭は如何、夫に對する節操、親戚朋友に對する上に於ても遺憾なく發揮せられて居るかと思ふ事を常に注意せねばなりません、實に一人の不心得は社會全体に關係を持って居る、一家に風波を起すものがあるれば其家滅亡の基である、故に私は是より進んで人類の上に廢物利用と申す語を轉用して見たいと思ふのであ

りませぬ
釋尊が舍衛國の祇樹給孤獨園にましくした時、其の國の給孤獨長者が子の婦に豪貴長者の女玉耶と云ふを娶りたりしが、玉耶己が容顏の端正無雙なるに矜りて、常に婦たるの道を以て舅姑及び夫に事へざりき、茲に舅姑共に議りて何を以てか婦の驕慢心を矯正せんと、千々に心を碎きました末、佛様が此の地に人天の御教化を遊されつゝある折柄なれば、御慈悲深き、難化の衆生をも教化し給ふと聞く、故に長者躬から佛の御許に詣て、懇請し奉りければ、早速に其の願ひを容れ給ひて、翌日佛は衆徒を將ひて長者の家に到り給ふに、長者欣び迎へて禮拜し奉りました、佛は供養を受け給ひて將に法を説かんとし給ひけるに、玉耶獨り己が室に藏れて出てませんから、佛は紫磨金色の御法体より大光明を放ちて、玉耶の室を照らされましたから、玉耶は佛の光明赫灼たるを見奉りて大ひに怖れ畏ぢまして、遂に佛の御許に参り合掌低頭して敬意を表しました、佛此の狀を御覽遊ばして玉耶に告げて宣

はく、女人と云ふものは容顏端正なるを以て美人と名づけず、唯心行端正にして人に愛敬せらるゝを美人と名づく、容顏端正なるに矜りて己を驕り、人を慢る者は後に卑賤に生れて人の爲に驅り使はれむ、玉耶よ女人の法に三障十惡あり、汝これを知れりやと、玉耶佛に答へて曰はく「未だ知らず、唯世尊願くば誨へ給へ」と
佛乃ち説き給ふに先三障とは
一者、小時父母所障
二者、出嫁夫主所障
三者、老時兒子所障
之れを三障と云ふので、第一は幼少の時には父母に束縛せらる、第二は嫁入しては夫に束縛せらる、第三は老ては子に束縛せらる、兎角女人は男子に倚頼して立たざるべからざる譯で、之れが所謂天性と申ものでありませう
次に十惡とは
○一者生時父母不嗜○二者養育無味○三者常憂嫁娶

失禮○四者處々畏人○五者與父母別離○六者倚他門
戸○七者懷妊其難○八者產生時難○九者常畏夫主○
十者恒不得自在
之れを十惡と申すので略して解きますれば

一者生れし時に父母嫌はず、二者養育するに後の樂
み少なし、三者常に相當の家に嫁せむことを憂ふ、
四者何處にても人を畏る、五者父母と生きながら別
れる、六者他人の家に倚頼す、七者懷妊の間難み多
し、八者産産の時苦み有り、九者常に夫を畏る、十
者恒に自在を得ず

玉耶、此の三障十惡の御説を聞き畢りて、身心戰々悚
れ、俯伏して佛に白しまするには、妾女人の身として
女人の法を知らずして道に反さ、禮に違ひき、願くば
更に婦たるの法を説き給へ、と申しました
佛此の狀をみそなはして、更に婦の夫に對するの道を
説給ふに、五等と申す事を以てす、五等とは

- 一、如母婦 ○二、如臣婦 ○三、如妹婦 ○四、如婢婦
○五、如夫婦

ふること所生の父母に事ふるが如く、尊み崇め敬ひ慎
みて、驕慢の心なく、家事を治め能く賓客に接して家
道を豊かにし家名を揚ぐる、之を夫婦と云ふと、懇切
に御説なされました、玉耶は低頭して一心に拜聽致
ました
佛は更に進て五善三惡の道を御示しになりました、先
づ

○五善とは

- 一には、舅姑及夫に過ち罵らるゝとも少しも瞋恚の意
なきを云ふ
二には、晚く臥して早く起き、美食あれば先舅姑及び
夫に進むるを云ふ
三には、一心に夫を守りて更に邪淫の念なきを云ふ
四には、夫の長壽を願ひて身を以て之に事ふるを云ふ
五には、夫の他行中には家事を整理して二心あること
無きを云ふ

○三惡とは

一には、舅姑及夫を輕しめ慢りて恭順ならず、美食な

一、如母婦とは夫を愛念して晝夜左右に侍して倦み疲る
ゝことなく、朝夕の飲食は心を盡し四時の衣服は意を
用ひ、亦夫が人の爲に輕しめられむことを恐るゝこと
猶母の子を懷ふが如くするを云ふ

二、如臣婦とは、夫に事ふるに、時ありては機事密情を
も夙かに諷諫をし、夫をして、やりそこないの無き機
に意を用ひ、善き言嘉き謀ある時は、密かに耳に入
れ功業あらしめ、過あらば善に遷らしめる等、總て臣
が君に忠なるが如するを云ふ

三、如妹婦とは、夫に事へて誠敬を盡くすこと兄弟の如
く、形を分けし同氣の如く、血を連ねし骨肉の如く、
親昵の情ありて疎隔の念なきを云ふ

四、如婢婦とは、心常に慎み畏れて敢て夫に相匹はず、
早く起き晚く臥して、忠を盡くし節を竭くすも猶及ば
ざるが如く、苦樂榮辱によりて心を二様にせざるを云
ふ

五、如夫婦とは、永く所生の家を離れて、出て、夫の家
を家とし、夫と異体同心の人となりて、夫の父母に事

れば自ら贖ひ、早く臥し晚く起き、夫に訶らるれば目
を睨らして怒り應ずるを云ふ
二には、夫を見れば歡はず、心常に敗壞して他の男子
の好を念ひ、夫死なば更に改め嫁せむと欲するを云ふ

三には、生業を修めずして世間に遊惰し他の美醜を論
じ、人の長短を説き、淫に口舌を闘はして郷黨親族の
爲に憎まるゝを云ふ
以上之れを五善三惡と云ふとテ説き給ひければ、玉耶
は信敬歡喜心に慚愧を生じまして、佛に申しまする
様は、妾は愚痴にして未だ佛を見奉らざる時、法を聞
奉らざる時、無量の罪惡を作り、諸の障礙のあるこ
とをも自ら覺知せざるを、今悟を開き意に解すること
を得ましたからは、自今己去佛の御慈誨を守り決して
違背せざらんことを誓ひますれば、救濟の御手を垂れ
給ひて佛弟子たることを許し給へと、佛言は善哉、
歸聽善思念之と、玉耶言く、唯願くは之れを説き給へ
と、佛即ち戒法を垂示し給ふに

一戒を持てば、仁慈の心を以て生けるものをいつくし

み救ひ、其恩禽獸に及ぶ
二戒を持てば、清淨仁讓にして盜せず、己を減じて衆
を濟ふ

三戒を持てば、貞潔にして姪せず、男女の間其道正し

四戒を持てば、妄語なく身心共に誠を盡す

五戒を持てば、酒を遠けて飲まず、衆惡を犯さず

玉耶よ、此世は久く住すべからず、生者必滅である、
壯年も必ず待むべからず、老少不定なり、唯汝此の戒

を持つことは頭に燃え付きたる火を救ふが如くせよと

玉耶、歡喜合掌して、器量自慢、豪族自慢の驕心を破

り、心開けて恭順なる良婦となり、長者の眷屬も齊し

く法雨に浴し、欣然として禮を作して退きぬ

之が佛説玉耶女經(藏經第十四套第二卷百七十九丁)の

説相であるが、真正なる出世間の教でない、全く世間

的の教訓である、故に佛の無上の極説でない、一機一

縁一婦人の爲に説いた隨他意經であることを御注意申

して置きます

を以て供養せんは、物の數にて數ならず云々

熱讀齋味せられむことを希望致します (完)

日蓮聖祖の史的御批判に就て

森川寛行

近時佛教研究の方面が混亂錯雜せる繁理空論を去り、
専ら史的研究と、現實社會の救済方面に注ぐ事になり
諸人多く佛教の教理探求を史實に求め、之を論證し、
且つ人格修養の聲四方に起れるが、是れ皆明治今日の
一時思潮の様思ふ人があるが、其は大なる誤解である、
佛教は單に出世間のみを論ずる者でなく、勿論現實社
會、即ち俗語方面を輕視する者でない、從て人格修養
の必要は無論の事である、余が茲に述べんと欲する處
は、其中史實批判の一部分、即ち九牛の一毛にも足ら
ざる者である、偕て日蓮聖祖は、教理變遷(余は單に
發展と云はず)の邪正を論評遊ばすに、一として史實
の證明にあらざる者はないと思ふ、今ま立正安國論の
御著述の所由も、其論證も、史實に依りて御判斷なさ
れて居る、彼の撰集の「準之思之」の四字を捕へ來り
て念佛門流の變遷を説破し、尙當時に於ける教家の情

併しなから驕慢無禮なる玉耶は佛の教化に依らずんば
決して恭順なる婦人となることは出來ぬ、玉耶自身の
幸福なるのみならず、此の御教の光は盡未來際の間を
も照すべく説かれてある

先年某學者は、令嬢の嫁入に此の御經を謄寫して持た
せて遣たと申事を聞きました、至極面白く話である
と思ふ、十荷の荷物を持せて行きて、一朝不幸に遇へ
ば、夫れまでだが、此經に教へられたる教訓は實に火

不能燒、水不能漂だ、獅子孫に迄及ぶ譯である、け
れども、今述べたる通り、隨他意の説であるから、皆
は進て佛の隨自意究竟の説を聞き、世間の樂及び未
來の大樂を得ることに心懸が肝要であります

日蓮聖人の善無畏と云御書に
女人と生れて百惡を身に備ふるも、根本は此の法華經
誹謗の罪より起れり、然らば此の經に値ひ奉る女人
は、皮をはいて紙とし、肉を切て墨とし、骨を折て
筆とし、血の涙を硯水として、書き奉ると云ふとも
飽く期有るべからず、何ぞ況や衣服金銀牛馬田島等

態を初めに於て擧示し給ふてある、其他各宗御批判の
時は、全く史實の論證を御用ひなさらぬ事はない、若
し吾人にして史實の關係を探求せず、其の解釋の起る
所由を明らめず、直に其書の文字章句に拘泥せば、多
くは其の會通に苦しみ、遂に牽強附會に陥いらざる者
は稀である、故に余は日蓮聖祖の百幾十卷の御文書の
中より、僅かに報恩鈔撰時鈔の二鈔に依り、如何に史
實を擧げて邪正を御批判し給ひしかをうかづて見や

と、の疑問を掲げ、漸次教理の變遷、歴史の證明に進ま
れたり

一代聖教をささるべき明鏡十あり、所謂俱舍、成實、律宗、法相、三論、
真言、密教、淨土、禪宗、天台法華宗也、此等の十宗を明瞭として、一切
經の心をしるべき歟

華嚴宗の杜順、智嚴、法藏、澄觀等
三論宗の興皇、嘉祥等
眞言宗の善無畏、金剛智、不空、慈覺、智嚴等
禪宗の達磨、慧可、乃至、慧能等
淨土宗の道綽、善導、懷感、源空等
此等の宗々の人々、皆本經本論によりて、我しく一切經をさとれ
り、佛意をさしめたりと云々

かく各宗の名僧智識を列擧し、各々所見に依りて佛典
を解釋し、各宗分裂の來る所以を示し、華嚴宗は華嚴

經を第一とし、三論宗は百論十二門論中觀論の三論によりて、八不中道の眞理を主張し、眞言宗は大日經、金剛頂經、蘇悉地經に依りて宗を立て、禪宗は教外別傳不立文字と主張し、淨土宗は淨土の三部經に依り、各々是れ佛意なり、佛教なりと、殆ど一國に數人の大王ありて命令一ならざる如きである、茲に於て蓮祖は涅槃經の

依法不依人

の金藏により、教理の眞髓を探り、歷史上所謂名僧智識の輩出したる理由を究め、單に高位虚譽の名僧には眩惑服従し給はぬのである、故に歴史上名僧と云はれ智識と仰がるゝ、諸師の時代、及び教系を精研し給ふ必要が起るのである、先づ支那眞言の教理教系より漸次日本密宗の御着眼が、うてである

大唐の玄宗皇帝の御宇に、善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏、大日經、金剛頂經、蘇悉地經を月支より漢土に渡す、此三經の説相分明なり、其極理を尋ねれば、會二破二の一乘、其相を論ずれば、同と眞言と計なり、向難般般若の三二相對一乘にも及ばず、天台宗の爾前の別圖程もなく、但藏通二乘を面とす、然而善無畏三藏をもはく、此經文をあらはに會出する程ならば、華嚴法相にもを、つかれ、天台宗にもわらはれなん、大事として月支より持來りの、默止して息なば本意にあらすことと思ひけん、天台宗の中に一行禪師と云ふ僻人一人あり、此をか

し、三密相應する程ならば、天台宗は意密なり、眞言は甲なる將軍の甲鎧を帶して弓箭を横たへ、太刀を腰にはけるが如し、天台宗は意密計なれば甲なる將軍の赤練なるが如くなるん、といひければ、一行阿闍梨は此やうにさきけり、漢土三百六十箇國には此事を知る人なかりけるかのおひだ、始には勝劣を争論しけれども、善無畏、人おらは重し、天台宗の人人は輕し、又天台大師はこの智ある者もなかりければ但日々眞言宗になりてさてやみにけり、年久しくなれば、いよ

右の御文書を拜讀すれば、眞言の教理、眞言の教系、弘通の時代、及び天台と眞言の關係が尤も明瞭である、然り元來眞言宗は、其根元に溯れば、一の單純祈禱宗に過ぎないので、大日經、金剛頂經と云て、格別の特色、高尚の理論が有るので無く、儀軌的の説が多く、其他眞言に關する書は多々あるが、多く神咒若しくは、どの佛にはどの儀式禮拜、彼の菩薩には此の儀式を用ゆると云ふ様な事が多いのである、又た印、眞言などは、外にない特色で有るとさはぐけれど、原と印契の源根を探究すれば、佛在世九十六種有つたと云ふ、外道婆羅門系から傳つた者で、婆羅門の惡鬼、拂ふ手振足振の舉動が、漸次規則らしくなり、印契などと云ふしかつめらしき者となつたのである、又た眞言秘密と云ふも同じく、婆羅門系の聲論派等より轉化した者で、

たらひて漢土の法門をかたらせけり、一行阿闍梨うちのかれて三論法相華嚴等をあら／＼かたるのみならず、天台宗の立けるやうを申ければ、善無畏をもはく、天台宗は天竺にして闍しにもなほうち勝れて、かさむべきやうもなかりければ、善無畏一行をうちひて云く、和僧は漢土にはこそかしき者にてありけり、天台宗は神妙の宗なり、今眞言宗の天台宗にかさむこと、は、印と眞言と計なりといひければ、一行ともと思ひければ、善無畏三藏一行に語て云く、天台大師の法華經に説をつくらせ給へること、大日經の疏を造て、眞言を弘通せんと思ふ、汝かきなんやといひければ、一行が云く、やう候、但しいかやうにかき候べきぞ、天台宗は、にくき宗なり、諸宗は我もしくと等ひななせども、一切に叶はざる事一あり、所謂法華經の序分に、無量義經と申經をもて、前四十餘年の經々をば其門をうちよさぎ候の、法華經の法師品、神力品をもて、後の經々をば又たふせむせぬ、肩をならぶ經々をば、今説の文をもてせめ候、大日經をば三説の中にばいづくにかをかき候べき、と問ければ、爾時に善無畏三藏大に巧んで云く、大日經に住心品といふ品あり、無量義經の四十餘年の經々を打はらうが如し、大日經の入淨菩薩巴下の諸品は、漢土にては法華經大日經と二本なれども、天竺にては一經の如し、釋迦佛は舍利弗獨勤に向て、大日經を法華經と名けて印と眞言とをすて、但理計を説けるを、羅什三藏此を渡す、天台大師此を見る、大日如來は法華經を大日經と名けて、金剛薩埵に向て説かせ給ふ、此を大日經となづく、我まのあたり天竺にして、みれを見る、されば汝がかくべきやうは、大日經と法華經とをば、水と乳とのやうに一味となすべし、若爾れば大日經は已今當の三説をば、皆法華經の如く打落すべし、さて印と眞言とを、心法の一念三千に莊嚴するならば、三密相應の秘法なるべ

別段ありがたひ者でもなんでもない、其を三密相應と云ふに驚いた一行と善無畏の關係を、蓮祖は「善無畏一行をうちぬく」とは御明言である、元と善無畏も金剛智も中天竺の人であるが、善無畏は大日經を譯して胎藏界を傳へ、金剛智は金剛頂經を譯して金剛界を傳へ、之れに蘇悉地經を加へて眞言の三部經と云ふのであるが、善無畏は唐の玄宗開元四年、金剛智は同八年支那に來たもので有つて、天台大師の入滅即ち開皇十五年から百年餘も經てをるから、天台大師の説が益々發展せなければならぬ譯であるが、之れに反して方角違ひに天台主義が變化した、そこで開元十一年大鸞禪寺に於て、一行は金剛智より金剛頂經を筆受し、又た同十三年に善無畏より大福先寺に於て大日經を筆受し、調飾した、其後に一行自ら大日經疏二十卷を述作したのである、さてこの一行禪師は、當時天台屈指の學者で有つて、天台の教理は勿論、華嚴禪等にも達した智識である、故に一行は天台の教理によりて、大日經を解釋した者であるから、一の單純祈禱宗が、高尚なる理論的經典となつて、大日如來の光明も輝きだした、是れが抑も眞言宗と云ふ一宗を形作り、しかつめらしくなつたのである、其れて眞言宗を分析すると、權

教に華嚴宗と天台宗と之れに婆羅門系を加へた混血宗である、其れより不空になりて眞言も、さすく陸盛の極に達し、玄超、惠果を経て弘法大師がいよく本邦へ流傳した順序である、兎に角眞言宗の印、眞言は特色でも事勝でもない、強て秘密宗の特色を擧ぐれば、多神教にして尤も異形の佛陀に富み、怪談的傳説の多き事であらう、次に弘法大師と云ふ本邦密宗の開祖一大偉人は如何であらうか

石瀧の勳操正の御弟子に空海と云人あり、後には弘法大師と號す、去延暦二十三年五月十三日に御入唐、漢土に渡りては、金剛智、善無畏の兩三藏の第三の御弟子慧果和尚と云し人に兩界を傳授し、大同二年十月二十二日に御歸朝、平城天皇の御宇也、桓武天皇は崩御なりて平城天皇に御見參、御用ありて御歸依他にこゝなりしかとも、平城程もなく嵯峨に世をさらせ給しかば、弘法思煩て有し程に、傳授大師は、嵯峨天皇弘仁十三年六月三日に御入滅、同弘仁十四年より弘法大師王の御師となり、眞言宗を教へ奉りて、東寺を立て給ふ、眞言和尚と號し、此より八宗始る、一代の勝劣を判じて云く、第一眞言大日經、第二華嚴、第三法華涅槃等云々、法華經は阿含方等般若等に對すれば眞言の經なれども、華嚴經、大日經二經に望むれば眞言の法也、教主釋尊は佛なれども、大日如來に向ふれば無明の邊城を申して、皇帝と浮圖との如し、天台大師は蓋人也、眞言の醍醐を盜て法華經を醍醐と云ふなどいれしかば、法華經はいみじと思へども、弘法大師に値れば、物のかよにてもあらず、天然の外道はさて置ぬ、漢土の

論ある、かくする内に、傳教大師は嵯峨天皇弘仁十三年六月四日に五十六歳にして、叡山中道院に於て大圓寂を示めされた、これからは弘法大師の一人舞臺である、然るに弘法大師の人格と云ひ學識と云ひ、實に非凡であるから、上は天皇陛下の御信任と云ひ、其他公卿百官の瞻依と云ひ、隆々朝日の勢て有る、嵯峨、淳和、仁明三朝の御信仰は非常な者で、終に仁明帝の承和元年唐の内道場に准じて、宮中に眞言院を置き、勸解由司廳を以て此れにあて曼荼羅道場とし、盛んに孔雀王法、請雨法、一字金輪、佛眼、降三世、軍荼利、金剛夜叉、五壇法等の加持祈禱の鈴の音にいと騒敷しき有様であつた、随分平安朝の文學を見ると、祈禱の有様など面白く讀まる、邊が澤山ある、さて例の印、眞言で奈良の古宗は勿論、傳教大師の末流も、目眩し耳聾し、たぢ／＼の受太刀になつた、されど單に印眞言で、天台流は直に落城する者でない、そこで弘法大師は卓犖豊富の學識を以て、大日經及び菩提心論に依り十住心を立て、佛教全体を判じた、即ち第一に異生麁羊心、第二愚童持齋心、第三嬰童無畏心、第四唯蕚無我心、第五拔業因種心、第六他緣大乘心、第七覺心不生心、第八如實一道心、第九極無自性心、第十秘密

南北が法華經は涅槃に對すれば、邪見の經と云しにも勝れ、華嚴宗が法華經は華嚴經に對すれば、技末教と申せしにも超たり、彼月氏の大慢婆羅門が、大自在天、那羅延天、婆伽天、教主釋尊の四人を高座の足に造り、其上に昇て邪法を弘めしが如し

此御文は確かに傳教大師、弘法大師の史的關係、并に下尅上の御批判である、抑も弘法大師は、光仁天皇寶龜五年に生れ、幼より聰明穎智であつた、初めは大學に入りて儒學を研究し、二十歳の頃は文章に達し、儒教に精通し、且つ筆力も凡てなかつた、然れども後佛典に志し、勳操に師事し、三論宗を研磨したから、八不中道の空理の奥底を窮めたるのみならず、既に華嚴其他法相の學理にも熟達したに相違ない、年三十一歳にして内外の教典に精通して入唐し、當時唐の碩學惠果阿闍梨に付き金胎兩部の灌頂を受け、且つ般若三藏に遇ひ更に華嚴の玄理を知り歸朝した弘法大師は、實に偉人である、明治五六年頃洋行歸りのパツストルでも其名聲はとて足にもをつゝかない、時に傳教大師は既に比叡山に鎮護國家を標榜する大道場を建立し南都の古宗を挫き其の聲望と云ひ、學説と云ひ、實に侮るべからざる勢である、そこで傳教大師の弘教の法を見る必要もあり、且つ主張點を取調ぶる必要が勿

莊嚴心とし、傳教大師所依の法華經は、第八如實一道心に屬し、華嚴は第九極無自性心とし、眞言大日は秘密莊嚴心なりと判決し、とう／＼弘法大師からは法華經も第三位に蹴落された、茲に於て天理教の單純なる迷信教も、漸次高尚の理屈があるらしくなり、非常な速力で傳播の理由が思ひやらるゝ、後に正覺坊覺鑿とて、眞言新義の大將は、「尊高者不二摩訶衍佛、驢牛三身不能扶車、秘奧者也兩部漫陀羅教、顯宗四法不堪採履」と、さて／＼法華經は大日經のはきものとりにも及ばず、釋迦佛は大日如來の牛飼にも足らずと極論するに至つたもひりが無い、かく事相の印眞言と云ひ、學理と云ひ、組織整然として三密相應の油には何にとて傳教大師末流も滑べらざるを得ず、とう／＼眞言に落亡び、東密台密となり、眞言天台混亂の時代に遷つたのである御書に

慈覺大師は去る承和五年に御入唐、漢土にして十年が間天台眞言の二宗を習ふ、法華經大日經の勝劣を尋し、法全、元政等の八人の眞言師は法華經と大日經は理同事勝等云々、天台宗の志遠、廣修、維等に習しには、大日經は方等部の攝等云々、同承和十四年九月十四日に御歸朝、嘉祥元年六月十四日に宣旨下、法華經、大日經の勝劣は、漢土にして、しりあたりけるかの故に、金剛頂經の疏七卷、蘇悉地經の疏七卷、已上十四卷、此疏の意は大日經、金剛頂經、蘇悉地經の義

と、法華經の義と其所詮の理は同一なれども、事相の印と、眞言とは、眞言の三部經時たりと云云、此は偏に善無畏、金剛智、不空の造たる大日經の疏の意の如し、智證大師は本朝にしては、眞義和尙、圓澄大師、眞言密傳の弟子也、眞義の二道は大體此國にして學し給ひけり、天台眞言の傳授の御不審に、漢土へは渡り給ひけるか、去仁壽二年に御入唐、漢土にしては眞言等は法全、元政等に習はせ給ふ、大體大日經と法華經とは、理同事殊異覺の義の如し、天台宗は眞言和尙に習給、眞言天台の勝劣、大日經は華嚴法華經には及ばず等云々、七年か開漢土に經て、去る貞觀元年五月十七日御歸朝、大日の旨歸に云く、法華尙不レ及況日餘教乎等云々、此釋は法華經は大日經に劣等云云

日本觀山に傳授大師の御時、法華經の行者御座けり、眞義、圓澄は第一第二の座主なり、第一の義眞計傳授大師にたり、第二の圓澄は今は傳授大師の御弟子、今は弘法の弟子なり、第三の慈覺大師は今は傳授大師の御弟子にたり、御年四十五にて漢土に渡てより名は傳授の御弟子にて、眞跡をば編がせ給へども、法門は全く御弟子にはあらず、然れども圓頓の成計は又御弟子にたり、編編鳥の如し、鳥にもあらず鼠にもあらず、鳥鳥禽破鏡の如し、法華經の父を食ひ、持者の母をかめるなり、日を射と夢見し是なり、死去の後に墓なくてやめ、智證の門家圓頓寺と、慈覺の門家觀山と修羅と惡龍との合取ひまなし、圓頓寺を燒き觀山をやく、智證大師の本尊の慈氏菩薩を燒ひ、慈覺大師の本尊大菩薩を燒ひ、現身に無間地獄を感ぜり

日本天台宗の初祖傳授大師は、行表、簡然より禪を學び、道遠、行滿より天台を學び、順曉より眞言を傳へ

生滅之郷、百物生名、未レ涉眞如之懷、豈若下隨陀權教之開三乘機路、隨自實教之示一乘道場哉、然則妙法難レ傳流、其道者聖帝、圓教難レ説演、其義者天台、伏惟 陛下出震承闕登極騰運、東夷之郷化、歸三德於先年、北蕃之來朝賀、正于每歲、猶是萬機之暇、一乘惟懷、冀得三圓宗、垂爲二大訓、由斯、妙圓極教、應三聖代、而流傳、秘密眞宗、感三皇緣、而格止、最澄奉レ使求レ法、遠踏三靈蹤、台嶽越レ疆、躬寫二教迹、所レ稜經論疏記二百三十餘部、並五百卷、又金字法華、金剛般若等經智者大師禪鎮白角如意等、隨レ表奉進云々、是れに依て見れば、天台の教理を弘布すると同時に幾分眞言に關する事も傳へ、後に清瀧高雄道場に諸寺の知行兼備の僧を會して灌頂三摩耶を受けしめた、然しながら大日經をば法華天台宗の傍依の經となして、華嚴大品、般若の例とせられたのである、故に法華開會の上から傳授大師は顯密一致論を立てられたのである、慈覺に至ると理密俱密を分ち、理同事別を論じ、終に智證、安然に至れば、理同事勝と説き、顯劣密勝を談じ、五時五教の判をなし、全く眞言に降服して終に今日に至つたのである、故に運祖は寺は天台宗なれども僧は皆眞言宗なりと遊ばされたのである、チョード東鷄冠山が

給ふたから、奈良の六宗は勿論、眞言にも通じられた、尙奈良六宗の碩徳も傳授大師の學説には對抗できなんだらしひ、そは延暦二十一年正月桓武天皇高雄に行幸あり、南都六宗の大僧を召集し宗論せしめたる時に、六宗の碩學表捧をげて「竊見天台玄疏一者、總括三釋迦一代教、悉顯其趣、無所不通、獨逾三諸宗、殊示一道、其中所說甚深妙理、七箇大寺、六宗學生、昔所レ未レ聞、會所レ未レ見、三論法相久年譯、漁焉氷釋、昭然既明、猶下披三雲霧、而見三光」と云々と讃嘆した、蓋し法華經は既に業に聖德太子の時、唯一として尊信せられて其疏を御製作なされ、聖武天皇の天平十三年には諸國に詔して毎國に法華滅罪の寺を建立せんと遊ばされて居るから、法華經の傳來は勿論久しき以前であり、天台大師の三大部等も眞義和上の帯び來りしよしなれば、是れも奈良朝時代よりあつた者であつたが、傳授大師に至つて初めて其の價值を發見されたと云ふ者じや、傳授大師、天台大師の三大部を御覽なつてから純粹法華主義の尋求に渴望の念切にして、勅許を得て入唐し、専ら法華主義を研究された、そこで傳授大師歸朝の上奏文を見れば、傳授大師の意見は粗推察する事を得る、曰く「沙門最澄言、竊以、六爰探顯、猶局

落ち、三龍山が落ち、二百三高地が落ち、終に開城となつた、旅順開城記がそつくり天台宗對眞言宗である、併し慈覺大師、智證大師として、其學徳弘法大師に譲らず、傳授大師にあながち劣る御方ではない、慈覺大師は大同三年御年十五歳の時、傳授大師に師事されて、傳授大師もことの外慈覺大師を鍾愛された、一日慈覺大師に訓誡された言は、最も傳授大師の眞意が發露されてをる、曰く、「吾れ常に三歸不生不滅の旨を弘傳す、而も世人眞歸不生不滅の理を解して、未だ世謬不生不滅の義を解せず、汝此の法を以て世に流傳して、圓教を弘通し、有情を利益せよ」と教示せられ、常に止觀文義の骨髓を指授されたので、眞言秘密に關する事は、傳授大師は一の附屬物位に思召されたらしい、最も傳授大師法華弘通と共に、大事業は圓頓戒壇の建立である、大師弟子等に告げて曰く「我れ自今以後會て受くるところの小乘戒を棄捨して、小乘聲聞の威儀を學ぶことを止め、大乘菩薩僧の威儀を學ばんと欲す、是故に我宗の學生にも、亦小乘下劣の戒定惠を離れて、大乘圓頓の戒定慧を修せしめんとす、是れ我誓願なり」と仰せられ、弘仁十年戒壇設立の旨を上奏した、實に此件は南都六宗には破天荒の獅子吼である、南都の六

宗の騷擾は非常の者で、鑑真以來東大寺、下野の藥師寺、筑紫の觀世音寺の小乗三戒壇の外に、大乘の一大戒壇が出来様と云ふ事であるから、日本佛教界曠古の大問題である、故に護命は表を捧げて之を斥け、東大寺の景深は「迷方正論」を著して圓頓戒の二十八失を摘舉して其非をならし、傳教大師は「顯戒論」三卷を述べて上表し又た「顯戒緣起」を作して景深の主張を反詰し、其詞最も激切著明であつた、併し戒壇建立はとうとう傳教大師滅後迄設立できなかった（戒壇の事は史實及び教理につき余は別に一文を草する機会もあらう）さて慈覺大師は非常の勉強家で、年四十歳の時修學の結果身軀疲れ眼昏し生命も久しからずと決心し、叡山北谷に草庵を結び、三年屏居修練した位で有る、去れど入唐數年の間に餘程眞言の感化を受け、歸朝後大に秘密法を尊敬したらしい、又た齊衡三年三月二十一日文德帝に兩部の灌頂を授け奉り、貞觀元年には更に菩薩戒を授け奉り、同二年淳和太后にも菩薩戒を授けられて居る處を見ると、皇室の御歸依も淺からず、其他著書を見てもあつたれば碩徳であつた事は察せらる、智證大師に至つては、弘法大師の血縁の甥であるが、十五歳にして延曆寺座主義眞に從つて剃髮した、智證大

師は、「兩眼重瞳にして頂骨隆起し覆盆の如し」とあるから、或は骨相學者に相せしむれば如何に非凡なるか、首肯さるゝかも知れぬ、未だ若年にして法相宗明證と教理を論議した事があるが、智證の問難激揚して懸河電を馳し、明證の對答拙遊にして詞理共に屈す、是れより名朝野に播く」とあるから辯論風發四筵を驚かすの英雋であつたに相違ない、元來其師義眞は、東大寺の慈賢により漢語に習熟せしを以て、傳教大師入唐の時教許を得て通譯者として、延曆二十二年四月遣唐使葛野麻呂と同じく入唐し、爾來傳教大師を師と仰ぎ、一方に通譯の勞をとると同時に傳教大師より法義を稟受したのである、智證大師は即ち義眞の弟子であるから、勿論師資相承の法義を守るべきであるが、智證大師も慈覺大師の如く入唐以來全く眞言化し、其行爲及び著述等、全く中天竺那蘭陀寺佛教の系統に屬する、内部佛教外皮婆羅門教の秘密宗になりたは事實である、是等一方から見れば佛教の發展と稱する事を得るかも知れぬが、法華主義の純粹發展なら蓮祖は勿論御養同なざるに相違ないが、悲むべし此教系は發展てなく混亂であるから、斷然排斥遊ばされたのである、其て前文の「蝠蝠島」の御譬喩もあるのである、サー是れ

からが大混乱で、天台の方を台密と云ひ、弘法東大寺の法は東密と云ひ、一方に仁王法をやれば、一方に如法尊勝法の祈禱をなし、彼に大北斗法を修すれば、此れに普賢延命法の祈念をやるといふ騒ぎで、平安朝は加持祈禱に事日なしと云ふて宜しき位である、其中延曆寺と園城寺は同系で、焼た焼かれたとの日夜の合戦、之れに加ふるに高野と東寺の軋轢、終に白河法皇は朕の意の如くならざる者、加茂川の水、双六の賽、山法師なり、と嘆き玉ふ厄介者になつたのである、然る間に弘法大師系にも、慈覺智證系にも、知者學匠と稱する者續々輩出した、且つ比叡山は諸宗の製造元となり、殆ど大圖書館の觀がある、是れより源信出て、空也出て、良忍出て、法然出て、榮西出て、親鸞出て、蓮祖も一時この圖書館に入られたのである

さて次に此の圖書館より出たる、念佛系に就て見よ

齊の世に曇鸞法師と申者あり、本は三論宗の人、龍樹菩薩の十住毘婆娑を見て、難行道、易行道と立たり、道綽禪師と云ふ者あり、唐の世の者、本は涅槃經を講じけるが、曇鸞法師が淨土宗にうつるを見て、涅槃經をすて、淨土宗にうつつて、聖道淨土の二門を立たり、又道綽が弟子に善導と云ふ者あり、難行、正行、二門を立つ、日本國に末法に入て一百餘年、後鳥羽院の御宇に法然と云ふ者あり、一切の道俗をす

すめて云く、佛は時機を本とす、法華經、大日經、天台、眞言等の入宗九宗一代の大小、密實等の經宗等は、上根上智の正像二千年の機のためなり、末法に入ては、いかに功をなして行すとも、其益あるべからず、其上彌陀念佛にまじへて行するならば、念佛も往生すべからず、此れ私に申にはあらず、龍樹菩薩、曇鸞法師は難行道となつて、道綽は未有一人得者さきらび、善導は千中無一とさだめたり、此等は他家なれば御不審もあるべし、慧心先德にすぎさせ給へる、天台眞言の智者は未代にをはずべきか、彼の往生要集には、顯密の教法は予が如き者の生死をはなるべき法にはあらず、又三論の永觀が十因等を觀よ、されば法華經眞言等をすて、一向に念佛せば、十即十生百即百生とす、いげれば、叡山、東寺七寺、園城寺等、始めは諍論するやうなれども、往生要集の序の詞は道理かきみへければ、顯密第一の顯真塵去落させ給て、法然が弟子となる、其上設ひ法然が弟子とならぬ人人も、彌陀念佛は他佛に比るべくもなく口すまみとし、心よせに思ひければ、日本國皆一同に法然房の弟子と見へけり、此五十餘年が間は一天四海一人もなく法然が弟子となる、法然の弟子となりぬれば、日本國一人もなく法然の弟子となりぬ

此御文は念佛系の流傳の状態を史實的に、最も鮮明に御示しになつてをる、元來念佛系は恰も阿彌陀如來と云ふ、漠たる形象を、曇鸞、道綽、善導、惠心、法然、親鸞と云ふ名僧智識が種々の妙術を以て漸次焦點を定め、盡十方久遠實成無碍光如來、末世の下根下機惡人女人攝收不捨と大攝影した教理史は、一寸趣味ある者

である、曇鸞は支那淨土教の初祖と稱すべき者で、先づ念佛門は曇鸞の「淨土論注」より見なければならぬ、其書に云く「譚案龍樹菩薩十住毘婆娑云、菩薩求阿毘跋致、有二種道、一者難行道、二者易行道、乃至此無量壽經優婆塞、蓋上行之極致、不退之風船也」と此れに依れば、龍樹菩薩の十住毘婆娑の難行易行は、單に菩薩について論じた者であるが、曇鸞は大經、觀經の文により、終に凡夫惡人の方へ集注し、凡夫惡人を念佛の正機としたり、元來念佛とは諸經論に十方佛陀の身相、功德、國土、及び名號を念ずるを念佛の通義とするのであるが、其れを法然迄に彌陀一佛の名號單唱往生まで集注するには餘程の時間を要するのである、曇鸞は「論注」に於て念佛の正機、念佛の意義、及び廻向の往相還相等を説明したけれども、彌陀念佛の教は何時の時に適するや、難行易行に勝劣ありやなしや等、判然たる區別はなかつた、是等を集注するは道綽の役廻りである、道綽の「安樂集」に云く、「問曰、一切衆生皆有佛性、遠劫以來應值多佛、何因至今、仍自輪迴生死、不出火宅、答曰、依大乘聖教、良由不得二種勝法、以排生死、是以不出火宅、何者爲二、一謂聖道、二謂往生淨土、其聖道一種今時

難證、一由去大聖遙遠、二由理深解微、是故大集月藏經云、我末法時中億々衆生、起行修、道末有二人得者、當今末法現是五濁惡生、唯有淨土一門、可通入一門」と此れによりて見れば、佛陀の教化に聖淨の二道あつて聖道は證し難く、末法今時は淨土の一門に限るとの決定である、漸く淨土教を末法に集注した、次に善導に至つて支那念佛教を大成した「往生禮贊」に曰く、「問曰、何故不令作觀、直遣專稱名字者、有何意也、答曰、乃由衆生障重、境細心麤、識屬神飛、觀難成就也、是以大聖悲憐、直勸稱名字、正由稱名易故」と茲に於て凡て觀念を排し稱名を易とし之を勸めたり、又た「散善義」に「衆生久沈生死、曠劫淪迷倒自纏無由解脫、仰蒙釋迦發遣指西方向、又籍彌陀悲心招喚、今信順二尊之意、不願水火二河、念々無道乘彼願力之道、捨命已後、得生彼國、與佛相見喜何極」と、茲に於てとうとう釋迦世尊も彌陀の使者となり、紹介者として世に出現せしつた事になりたり、亦た曰く「就行立信者、然行有二種、一者正行、二者難行、言正行者、專依往生經行者、是名正行、何者是也、一心專讀誦此觀經彌陀經無量壽經等、一心專注思觀、察憶念

彼國二報莊嚴、若禮即一心專讀彼佛、若口稱即一心專稱彼佛、若讚嘆供養即一心專讚嘆供養、是名爲正、又就此正中、復有二種、一者一心專念彌陀名號、行住坐臥不問時節久近、念々不捨者、是名正定之業、願彼佛願故、若依禮誦等、即名爲助業、除此正助二行已外、自餘諸善名雜行こと、是れにより行住坐臥四六時中禮拜口稱すべきは彌陀の名號、專注すべきは安樂淨土にして、天上天下唯我獨尊とは阿彌陀如來の事となり、支那の念佛系を大成したり、次に本邦に於て念佛稱名の首唱者と稱せらるゝ源信は、慈慧大師の弟子にして、深く顯密の學に達し、才智も衆に抽んでられた、故に後に覺蓮系は檀那流と稱し、源信系は惠心流と稱して其末流天台教理の解釋上相争ふ位に至つた、併し源信は世間の榮名を嫌ひ深く院内に屏居して、尤も著述を事とせられ、其著書凡そ七十餘部一百五十卷もあるとの事である、中にも「一乘要訣」「往生要集」は最も著名の者である、或時源信は台宗二十七疑を作て、宋の四明の知禮法師をためし、知禮も源信の學識深遠に驚いたと云ふから、餘程の學者であつたに相違ない、さて源信は天台系でありながら、何故に本邦淨土教の首唱者と稱せらるゝかと云ふに、元

と天台大師でも、傳教大師でも、凡聖一如、迷悟不二の理の上から、念佛往生を説き、止觀前方便として西方を欣求し、其れに關する説明もあるから、突飛に源信が淨土教を主張した譯でない、けれども「往生要集」に至つては、既に天台系の軌道を説し、支那の純淨土系を祖述した、加ふるに豊富の學才を以て諸經論の淨土に關する諸文を引き、遂に「夫往生極樂之教、行濁世末代之目足也、道俗貴賤、誰不歸者、但顯密教法其文非一、事理業因、其行惟多、利智精進之人未爲難、如予頑魯之者、豈敢矣、是故依念佛一門、聊集經論要文、披之修之、易覺易行」と序し、縷々淨土を讚嘆した、是より本邦叡山に於て彌陀如來は一種の異彩を放つた、此れより覺超、懷空、寬誓を経て良忍出て、「一人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行、是名他力往生」と云ふ天台圓融の理からわたりだした淨土教の融通念佛宗も出來た、是れより叡空を経て法然上人となつた、法然上人は年十三歳にして叡山に登り、源光に従ひ、次いで皇圓の下に屬し、終に久安九年黒谷の叡空に師事し、建久九年、藤原兼實公の請により、選擇集を還述された、ところが法然の學徳真に一世を風靡すると云ふ有様であつたから、山門

村本傳寺ニ合併シタリ (本年十月二十四日)
同縣同郡養老村東泉寺モ同縣同郡内田村本傳寺ニ合
併シタリ (本年九月十三日)

第八教區 千葉縣山武郡東金町常光寺、同縣同郡同町
西福寺ニ合併シタリ (本年十一月四日)
第十二教區 靜岡縣濱名郡吉津村妙立寺塔中、本行坊、
大明坊、十乘坊ハ就レモ本寺妙立寺ニ合併シタリ
(本年八月十四日)

右各下記日附ヲ以テ合寺ノ認許ヲ得タリ
明治四十年十二月 顯本法華宗宗務廳

雜報

●宗會議員と評議員 本宗宗會議員の總改選は、豫
報の如く十一月二十五日を以て投票の開票あり、各教
區共無事に適任者を推薦し、當選者も夫々承諾せられ
たり、隨て本月八日を以て宗會の正副議長互選を舉行
せられ、別項宗務廳告知の如く今成、能仁の兩師當選
承諾せられたりといふ、又評議員錦織師は老体の故を
以て、同鈴木師は法務部長就任の故を以て夫々辭任せ
られたれば、來る十二月十八日を期して評議員二名の
補缺選舉を宗務廳内に於て執行せらるるといふ
●德風會と茗谷學園 第一高等學校學生の團體たる
德風會にては、本月五日日本多日生師を聘して「諸種の

付け、何様の御來臨と見れば、參入候夏目布教師を先
發とし、七里の泥濘を破りて明日の大法會に參列せら
る、現更科村長初芝安三郎氏の率ゆる天童隊、主從總
て十八名、それ給養やれ宿割、暴雨何の者かは、給養
係の岩崎、鶴澤兩師目を廻さん計り、雨は降るは、
車輪を流すとは眞に是れ、誰れやら曰く、正に是れ甘
露の雨、其雨普等四方俱下歟、連日の砂塵これに據り
て滅除せんと、時〇時半役員ころ寝の夢を結ぶ
△廿四日 初日快晴、一天拭ふが如く片雲を認めず、
當町講中の寄附せる野口僧正染筆の二大旗は、朝風に
飄り、船手組合、及び各町村講中有志より納附の紅黃
白紫數十旗の大旗は、境内の各所に樹立せられ、商人
團寄附武者繪の大寶燈は、高く境内を懸し、見世物露
店さしにも廣き靈場も蟻の這ふべき餘地とてあらじ、
役員天幕の障營を構へて事務を開始し、庶務受附の混
亂殆んど戰時の如し、前八時三十分隣村權門の信徒に
して本宗特信家たる茂呂區鴉田厚二郎氏の引率せる軍
樂隊を先鋒とし、前の管長錦織大僧正、山岡時團副委
員長、森川本漸寺任職等來會し、千葉、姑ヶ崎、瀨田、
草刈、生實、村田等の天童隊、各教區參列僧員、各郡
町村講中信徒の面々、參集引も切らず、特に當日逼田
區數十名の信徒は、大八車に裝飾せる一駄の玄米と數
十籠の投餅とを滿載し、玄題の銘旗を推し立て玄題口
唱威儀堂々と參詣せられたるには、一同感慨を深から
しめき、次て八幡町自他宗より組織せられし五十餘名

法華經觀して講演を開けり、その會場は駒込東片町
西教寺なりしといふ、又茗谷學園の第七會講演は去る
八日に開會、本多日生師の本尊論餘論にて、古來門下
に於ける各本尊論者の主張とそれに對する講師の批判
にて頗る有益なる講演なりき、來る一月は十七日に第
八會を催すといふ

●千葉縣大法會詳報 前號誌上にその概況を掲げた
るが、今大法會庶務係よりその詳報を得たれば、重複
を厭はず茲に掲ぐ
縣下七里法華根本靈場濱野本行寺に於て執行の聯合大
法會並に開基日泰聖人四百遠忌は去月紙上に豫報しあ
りて讀者の知らるゝ處なるが、今其の詳報を記さんに

第一 大法會

△廿三日の光景 此の日は大法會前一日にして、大法
會の眞俗役員全部、及び萩原、渡邊の各布教師、各自
擔任の事務に就き、堂宇の莊嚴に、寶物の展列に、餘
興の整理に、僧員宿舍の割當に、朝來食も忘れん計り
の大奮闘、晝を過ぐる半點鐘、天何を感じけん今にも
泣出さん計りの天候、寺内に居を争ふ露店を始とし、
下炊事の番公より大會統理の總務迄、明日はとの眉間
に大じわ何と評せん様もなし、晚烏黄昏を告げ黒雲四
方をこむるの頃、堂宇の完備、炊事場の整頓はツと息
のつく間も有らず、大雨沛然として降り、路傍の炬火
點けし提燈、一時に消て黒暗々、嗚呼是れてはと嘆嗟
の聲も聞ゆる九時半、黒鴨仕立の腕車十八輛玄關に横

の題目隊は、黃手拭友禰下着の齋服にて玄題節面白く
練込み來り、沿道の混雜筆紙の盡すべきにあらず
午後〇時三十分警鐘一打、同一時大導師錦織大僧正、
大衆六十餘に、天童卅五名を引率し、嚴肅なる修法あ
り、四時終了、直に演說會は開會され、萩原、木村、
成島、各師の率ゆる傳道隊は、古市場、八幡方面に出
陣し、伊藤、今井、森川等の各布教師は、徹夜本堂に
益物利他す

△廿五日 中日晴快、大法會中最も盛況を呈せし當日
にして、夜來參籠の信徒と新來の信徒と各群を爲し雜
關云はん方なし、此の日 本宗管長親下御臨席あるを
以て役員が多忙言絶たり、親下奉迎員として今井布教
師、及び從僧三名、檀家惣代並木市藏氏軍樂隊を率ひ
前八時三十分蘇我驛に向ふ、道路布教隊は萩原布教師
を先鋒とし、是れに従ふ五布教師は曾我、今井、泉水五
田保に轉説し、還りし親下を迎ふれば、濱野信徒の一
團は揃ひの紅衣隊伍を整ひ玄題口唱蘇我驛指して出て
迎ふ、同驛の混雜營へん方なし、十時親下及び山根、
野口、笹川、梶木の諸聽員、今成僧正等御安着、驛前
新月亭に少憩、數百の出迎員等に繞圍せられ、沿道曾
我、今井、鹽田を経て會場に着御の光景は實に空前に
して、信徒等歡喜踊躍の狀王車の凱旋もや譬へつべき
か
後一時大導師管長親下導師、野口、山根、山岡、笹川
各師、別席には今成僧正、酒井家正統酒井安住寺主、

満山の大家と天童卅五名を引き具し嚴肅なる大法要謹修、後四時法會終了、直に親教は開始せられ、野口本山部長の前説に、猥下の御親教あり、多大の教益を普潤し給ふ

夜六時、本堂、奏誦堂、各房舎、立錫の餘地なし、各教區布教師の演説開始せられんとするや、千葉町本町、通町、市場、及び寒川各町の信徒數百名、宗祖御一代及び其れに因める珍趣の萬燈數十百本、玄題太鼓勇しく參詣して、數千百の燈光天に漲り、玄聲鼓鳴に和し、其の光景百雷一時に落下せるに異ならず、同信徒の爲め書院三坐敷を開放して遠來の勞を慰すれば、道路布教隊は捷くも數十樹ち列ねし萬燈下に高段を設け布教開筵せしは、七里法華傳道隊に恥ざる仕打なりき、是れと前後し本堂には、今井、梶木、笹川、山根、今成、森川、伊藤の各師順を逐て演説せられ、化導最も深厚なりし、猥下には本山部長御同伴、鈴木並木の惣代先導にて、後九時飯豐本家に轉坐靜臥し給ふ

△廿六日 終日微風晴快、前日に異ならずと雖も早朝各教區列席者にして歸寺する者多かり、猥下及び野口本山部長、梶木録事の各師は、九時副總務吉田師、從僧數名、及び並木、鈴木各惣代數十名と還送し、猥下の御意により樂隊等附隨せず、御送りの清むや村田區信徒八十餘名日泰聖人御遠忌の銘打たる大旗を眞先に題目踊り勇ましく參詣す

大法會に於ける音楽に従事し盡力せられる諸師は左の如し

日暮玄辯、小川玉秀、津田照雄、久保島日清、齊藤自正、久松光道、林孝叔、齊藤立靜、井上榮受、錦織慈圓、今井眞惠、金坂學信

第三 參列僧員と祝辭

- 一 山根宗務總監、笹川法務部長、梶木録事、各師員
- 一 錦織大留止、松本、今成、兩前正、及山岡評議員
- 一 伊藤 木村、成島、小竹、各宗會議員
- 一 萩原 飛山、森川、日暮、夏目、渡邊、光木、金坂、北田各布教師
- 一 齊藤海叔、赤羽日輝、小幡親正、小川玉秀、中山智秀、林孝叔、井上日冲、齊藤自正、松井道安、宮川、大川日教、田邊是教、金坂學信、島本順祐、立花容榮、今井眞惠、増田龜道、太田泰立、國吉貞辨、増田乾雄、寺田善海、諸師外拾數名

此の外縣會議員、本山信徒惣代、町村長議員、教育家、名望家、外數百名參拜せらるる
本大法會に對し祝辭を送附せられたる重なる人名を記せば、清瀨宗會議長、小川前總監、野口本山部長、市

後〇時三十分塔婆供養終了、直に今井布教主任によりて布教は開會せられ、後五時より中村總務主管の大神燈點火、萩原、夏目、海老澤等の各師、熱心説明の任に當り、聽衆四百餘名、境内興行の活動寫眞も中途閉會するの止なきに到らしめしは、法皇の威力感化の深き感涙の外なかりき、後十時四十分閉會後直に役員盡力者五十四名眞俗合同の懇親會は開かれ、中村總務の謝辭、萩原、井口、竹内、鶴澤、大塚、二村各氏の祝辭ありて、各宗門の萬歳を三唱し、撤會せしは前〇時卅分なりし、大法會事務開始より一月有半及び大法會三日間魔事なく絶大の盛況を以て終了せしは道俗信念の厚き處にして、宗門興立祖道復古の爲め慶賀に堪ざる處なり

第二 演説、説教と音楽

大法會中に於ける演説説教は左の如し

- 開會の辭 當番主任 今井日會師
- 師檀の關係 宮川光熙師
- 宗教と家庭 大川日教師
- 如來の慈悲 小幡親正師
- 大法會雜感 飛山日南師
- 安心論 渡邊乾航師
- 信法二行 成島泰行師
- 本化上行再誕の元由 木村乾中師
- 顯本の妙果 萩原啓門師
- 唱題成傳論 小竹俊雄師
- 宗教と道徳 伊藤實樹師
- 妙修妙行(其一、其二)

橋財團理事長、吉川本山信徒惣代、西村大覺青年會幹事、及び宗門有力の眞俗諸氏、特に吉川氏は京都講中惣代の名を以て金拾圓香資として喜捨せらる

第四 天童稚兒

千葉町大木氏外三名、譽田村森氏外三名、更科村初芝氏外六名、生實村篠崎氏外三名、草刈區鴉田氏外三名、村田區増島氏外一名、姉ヶ崎町齋藤氏外三名、濱野村白井氏外五名、男三女卅二名、惣數三十五名

第五 餘 興

△什家寶の重なる者を記せば、宗開祖の眞筆、當寺重寶の一なる泰聖御猿御書、北條氏政の軍令狀、同氏庸の制狀、經師撰法華經、日乘上人新門流書狀、土氣城主酒井公一族の甲冑、亦た大家飯豐家よりは、元寇の達磨、弘法大師の經文、千家の古茶器等、寺寶家寶等枚舉に暇あらず
園藝には萩原、鈴木兩氏の意匠になれる造庭には、中村山主の新撰にかゝる如意山八景を淡墨に顯せる額燈を始とし、川上、飯豊兩家、及び其他の大家より撰定出品せし奇樹珍品展列せられ、鈴木家には千葉町三上氏の熱誠よりなる快石軒古流師弟の挿花數十種點出せられ、竹内師の賢兄にして有吉區有力者大塚氏の助力に據れる同區青年團の寄附にかゝる里神樂は、大法會三日間獨特の妙伎を演舞して參拜者の感歎を深からしめき、其他他記すべき事多けれど左までと思ひ今は省

さぬ

第六 役 員

△前來詳記せし事業、一二人の手腕いかてか此の大盛事を完備し得べき、今此の大會に賛加し熱誠職に當りし眞俗の芳名を掲げて永く記念せん

- 總務 中村乾信 吉田純賢 鈴木豊吉 並木市藏 並木親助
- 會計 小高榮徳 山本日悟 飯野幸十郎 並木吉五郎 七進徳治郎
- 地檢幸之助
- 接待 竹内無著 井口春叔 佐野日健 萩原會雪 齊藤利三郎 日置榮吉 次倉房吉 叶親興吉
- 布教 今井日吉
- 法要 萩原啓門 津田察圓 齊藤立靜 鈴木日五
- 種兒 夏目智誓 山形眞瑞 山本信讓 海老澤乾樹 小倉治右衛門
- 並木安藏 増島庄兵衛
- 給養 岩崎會眞 高石快成 鶴澤純貞 伊保内教守 二村七郎 大能善太郎 草薙増五郎 並木忠吉 草田勲五郎
- 座席 廣部玄通 加藤會圓 大塚無偏 佐野泰晋
- 佛前 朝倉弘元 中村快念 若江乾英 大城實徳 並木源七 小倉寛治郎 草薙重太郎 並木増五郎 杉田豊吉 長島寅吉 石橋石太郎 福山石太郎
- 相續役 飯野利一 日置喜左衛門 日置直一 齊藤武助 杉田桂藏 杉田千代松

總て六十餘名此の外數十名の有縁の清信徒等日夜奔走の功こゝに到れるも繁き故略す(大法會庶務係記)

●叢日昌師の遷化 靜岡縣見付町本宗優待寺院たる玄妙寺住職僧叢日昌師は、在職中大に殿堂の修營、檀信徒の教導に盡力せられたりしが、去る十一月十一日遂に遷化せらる、仍ち功勞に依り特に權僧正を贈ら

とを懇々と述べ、第三席に於て管長親下御登壇、御經書量品の金文を御讀誦終て、諄々乎として御教諭あること約二時間、宗祖聖人の完全圓滿なる人格に就き、其主張に就き、其宗教に就きて理を述べ例を擧げ、進て現今の宗教道徳の腑甲斐なく根底なく、且つ雜亂せるを叱正し、更に國家社會に及ぼせる弊害の救済策迄懇説せられ、午後十時過閉會したり、聽衆は盡の法益の影響を受けて雨天なるにも拘らず滿堂、利益最も饒多なりし、中に一人(栃木縣廳の文書課尾澤某あり、居残りて庫裡の方へ來り曰く、只今の管長親下の御説教誠に有難かりし、特に青年輩及教育に従事するものには是非聞せ度き教訓なり、希くは明日若くは明後日頃師範學校の講堂にて一席の御講演を願ひ度、と申出てたり、以て其法益の甚大なりしを想察す、へし(この人翌日師範校に交渉せし處、目下演習中にて何時軍隊より參觀に來よと命じ來るやも知れざる故、講演は望む處なるも目下は機會悪しと斷れたりとして、斷りに來りて曰く、甚だ遺憾の至りなれど今は據らなし、來月か若くは來春一月頃には是非講演を願ふ様に致したし云々として、師範校の講演は遂に沙汰止みとなりし)翌四日管長親下は、野口本山部長を隨へ鹽谷郡片岡村本經寺へ向て御發錫遊されたり、因に品川町信徒の隨行は淺尾清造氏石川ひめ子氏なり(十一月十二日白毫生報)

●栃木教信 第一教區栃木縣茂木町本岡寺に於ては去る十一月十七日宗祖御會式に付、特に東京より僧都

れ、又管長親下並に宗務總監等より夫々懇篤なる吊詞を電送せられ、同月二十日日本葬の儀式を擧げられたりといふ嗚呼可惜哉

●宇都宮通信 當地大演習兵隊の入込みし爲め市内一般にわさ／＼致居り人々心の落着かざる態相見へ申候、去る二日本多管長親下御巡教の爲め御來錫あり、隨行員は野口本山部長、鈴木擔當評議員の二名なり、當日法華寺檀家惣代等重立を召集し該寺の基礎確立方法に就て種々御懇諭有之、翌三日は天長節の佳辰なるを以て當市唯一の公會堂たる旭日館にて午後一時より演說會を開會したり、演題及辯士は

- 開會の旨趣 幹事 木村義明師 鈴木時學師
- 眞實の幸福を欲せよ 野口義禪師
- 日經上人と宇都宮 管長 親下
- 統一の傳教觀

午前十時頃より折悪く雨天となりし爲め聽衆極めて僅少なりしは甚だ遺憾なりし、然れども參聽者は何れも多大の感動を受たるらしく、特に管長親下の御演説に對しては、歸路各或歎措かざる態に語合ひつゝ行くを見受けたり

夜に入りて六時頃より法華寺本堂に於て説教會を催す、第一席に於て、品川町の信徒にして最も折伏家の評ある淺尾清造氏は、露拂として各宗評教を試みて當地の盲目信徒を驚かし、第二席に於て野口僧正は、天長節の佳辰に因みて祖判「五節句にも南無妙法蓮華經」の旨意に就て、形式には精神の伴はざるべからざるこ

笹川眞應師を招聘し盛大なる法會を營み、右終て同師と題して約三時間に亘る演説あり、聽衆五百餘名、遠きは十里を離れたる地方より來聽し、多大の法益ありしといふ

●姫路立善婦人會 同會は回を追ふて益々盛況となり、去る九月中には第三回を開き、その際去る八月中水害地救済の爲め金品を募集するととなり、爾後集聚せる物品合計百三十六點に達し、金四圓〇五錢を得たれば、夫々寄贈方の手續を了したりといふ、さて十月の第四回も例の如く琴尺八の合奏、發音器等の餘興もあり、會員外の來會者もあり、頗る盛況なりしといふ、今第四回に於ける會長野老乾爲師の講演筆記を得たれば本誌上に掲ぐるとせり(寄書欄参照)

●岡山教信 岡山教界に於ける消息は、此の二三ヶ月間紹介するを得ざりしが、今去る八月以降の教況を該括して讀者に報ずる機會を得たり、即ち同地本行寺に於ける例月の公開演説は、八月二十七日午後七時半より開會、聽衆二百三十餘名、辯士演題は

- 一念三千論 松崎事成
- 日蓮上人の幸福觀 山名木信
- 法華經の吾人に與ふる變化 能仁事一
- 本門の成行 中原通典
- 破國の因縁 原田容廣

法華信仰の實現
十月二十六日夜開會、聽衆百名餘、演題等は

法華經信仰の徳用
佛敎に對する智力と意志
能仁事一
松崎事成
原田容廣
能仁事一

同夜は岡山敎會牧師某、有名なる岡山孤兒院主石井十次等の基敎徒來聽し、演說後刺を通じて能仁師に面晤し、近々岡山基督教會に同師を請じて吾が日蓮主義の講演を聽かんことを依頼したりといふ、由來岡山縣下は宗敎心旺盛の地とて、基督教にても牧師を精選して常在せしめ居る實況なれば、今後二敎の比較研究起るの日は、定めて宗敎界の精華を發揮すべきか十一月二十三日午後六時半開會、雨天なりしも百有餘名の聽衆ありき、演題等は

恐るべきは辯法の罪
日蓮上人の傳敎觀
本佛の力用
松崎事成
堀木日種
能仁事一

同夜演說終了後、御流義の信者某、能仁師に質疑する所あり、同二十八日再會を約して尙ほ詳細敎示を仰がんとて歸へりぬ
本行寺主能仁師一師が赤磐郡に於ける諸種の會合に請せられて八月以降宗義の講演を爲せるものは
一、八月二十四日赤磐郡物理村高等小學校に於ける赤磐郡婦人會に臨み、午後一時より「女之道」に就いて講演あり
此際婦人同窓會よりも招請ありしが、大暴風雨の

雪中蒙原三昧堂の條下を辯せらる、特種の快辯に信仰の熱誠を加へ、深く聽者を感激せしめらる、尙ほ每會講話の前に祖書妙文の朗讀會ありて、老幼の婦女相交りて朗讀を練る所、誠には宗教的快樂の生活を實現するもの感慨最も深し、現に同會は第十一次の會合を重ねたり

岡山本行寺は目下庫裡其他の改築工事に着手し、先づ土塙の改築を進めつゝあり、かゝる多忙の折柄なるも寺主能仁師に請ふて師が公私團體に於ける有益なる講演は、向後筆記して特に本誌に寄稿せられんことを約し、已にその承諾を得たれば、今後時々誌上に同師の高説を掲載すべし

津山通信
當地本蓮寺住職梶木日種師は去る六月より本宗事務廳詰となり上京中の處、今回は宗祖御會式に付歸國せられ、去る十一月十七日は本蓮寺に於て同二十日は弘通所に於て、御會式法要を厳修せられ、兩日とも午後演說會あり、當地出身の高木本願師恰も歸省中にて、林日法翁も不相變勇氣を鼓して夫々熱誠ある演說ありき、殊に十七日は夕刻より本蓮寺並に弘通所の檀信徒總代、世話人、重立は當地橋本町吾妻樓に會して、津山に於ける敎學財團勸募成效の一大祝宴を催はし兼て梶木師の陞進を祝せり、由來當地は會て第一養院日容上人が當時吾が宗門の陵夷を慨き、空中山の榮職を捨て、岡山津山の間に退身せられ、爾來宗門革命の爲めに不惜身命の化導を勵まれ、多年敎學の

爲め出演なかりしといふ
一、八月二十三日同郡豊田高等小學校に於ける同校同窓會には、赤磐署長、工學士某、藤澤技師等の講演あり、次で能仁師は「宗敎信念の發現と徳義」と題して講演あり

一、九月四日同郡高陽高等小學校々堂に於て、地方青年及び敎職員の會合あり、縣立農學校技師、農業試験場青山學士、郡長等の講話の後、能仁師の「佛敎の救ゆる徳義」といへる講演あり、此日聽衆四百餘名、非常に盛會なりしといふ

又岡山縣立師範學校より年來能仁師へ特に囑托せる講演は同校に於て毎回百名以上の學生に對し、毎週一回食後に出演せらるゝ都合にて、目下は「佛敎道徳論」を講じつゝありといふ
又縣立農學校への出演も去る九月中例の如く出席せられたる由

日蓮研究會は毎月二回(第一第三土曜日)開講、目下祖書講義は持法華問答抄にて矢張能仁師出演せらるゝ、同會には有益なる典籍を購入蒐集して會員の研鑽に資すといふ
岡山婦人會は毎月十五日同地弘通所に會合、月を追ひ盛況を呈し、已に記者が訪問したる折には、恰もオルガン(二個ストップ付)の分を新たに購入せられて兒童に宗敎を敎習せられ居る状態にて、目下會員百五十餘名に達し、會日に能仁師の祖傳講話ありて、現に佐渡

復興を期待し玉ひつゝ、晩年稍その志を果し東上して宗門育英の要職に復せられ、間もなく遷化せられたるが、爾後宗内庶般の刷新は着々その歩を進め、幸に昨年新たに敎學財團設立の盛舉あるに至り、今や我が津山は貧地小檀なるにも拘はらず、財團勸募の成績に於て最も優秀なる地位を占め、他に率先して仕職の陞進を見るに至りたるは、蓋し先師日容上人の精神我等が心内に入り替らせ玉ふて茲に斯の光ある宗門百年の大業を翼賛せしめ玉ひ以て他の模範となり、魁ともなるに至らしめ玉へると信ず、師の法澤に浴する吾人豈に一大白を擧げて之を祝せざるを得んや、茲に於てか吾妻樓の祝宴となり、席上梶木師の挨拶あり、林翁の所感演說あり、玉置圓治郎君の祝歌朗讀、上田竹治郎君の祝賀演說等ありて、一同十二分の歡を盡し法蓮の萬歳を謳歌しつゝ散會せり、會合せし重なるものは前記の外に妹尾利太郎、同平治郎、同増治郎、谷口早太郎、田口政造、井上幾治郎、林伊平、武田萬作、同久吉、神崎虎藏、池田勝藏、多羅尾務、安藤幸成、玉置繁藏、牧尾鹿藏、小林傳六等三十餘名なり(田口生報)
●統一團位置の移動
統一團本部は從來東京市淺草區本立寺内に設置の處、別項に掲載せる如く、全寺は今回事外に移轉することとなりたれば、以來府下品川町妙國寺内に本部を移動することとなり、品川町は幸に高輪郵便區内なれば、通信上従前と毫も異なる所なし、尙ほ廣告欄參觀せられたし

於青港

誓心通心生



明治三十年

明治三十年二月廿四日 第三編 郵便物認可 (毎月一回) 明治四十七年十二月十五日 第一編 郵便物認可 (毎月一回)

財團彙報

▲財團寄附行爲中の訂正 義に本誌第百卅七

號に掲載せし教學財團寄附行爲中左の各項訂正の義追願として設立者諸氏より内務大臣に提出せられたり

教學財團寄附行爲訂正追願

第二條 「顯本法華宗教學財團」トアルヲ「教學財團」ト改ム

第三條 「妙滿寺ニ置クト」アルヲ「妙滿寺ニ」トシ左ノ文字ヲ加フ

「事務支所ヲ東京府荏原郡品川町宗務廳出張内及ビ姫路市五軒邸妙立寺内ニ置ク」

第四條 資産合計及内譯ヲ左ノ如ク改ム

一金貳萬六千七百圓也

内譯

一金壹萬五千圓也

公債證書

一金壹萬壹千七百圓也

市橋區藏三宅六藏 中村祐七へ寄宅

第五條 「六種」トアルヲ「八種」ニ改メ「特別會員」ノ次へ左ノ二種ヲ加フ

護持會員 金五拾圓已上出金セシ者

正會員 金參拾圓已上出金セシ者

第拾六條 「定メ」トアルヲ「定ム」ト改メ「總裁之ヲ任命ス」ノ七字ヲ刪ル

第拾七條 「總裁」ノ下左ノ如ク改ム

「ノ同意ヲ得テ之ヲ解任ス」

第二拾二條 「若干名」トアルヲ「四十二名」ト改ム

第二拾三條 「ノ推薦ニ依リ總裁之ヲ任命ス」ノ十三字ヲ刪リ「ニ於テ之ヲ撰定ス」ノ八字ヲ加フ

第二拾四條 「特撰」トアルヲ「撰任」ト改ム

第二拾五條 毎年一回之ヲ開キトアル「之ヲ開キ」ノ四字ヲ刪リ請求アリタル片之ヲノ下ニ「財團事務所ニ」ノ六字ヲ加フ

明治三十九年十二月

(教學財團法人設立申請人連名)

▲教學財團役員 同寄附行爲ノ規定ニ基
キ左記ノ諸氏就任セラレタリ

總裁	管長	本多 日生
理事長	市橋 龜藏	
理事	三宅 六藏	
理事	中村 七祐	
理事	久城茂太郎	
理事	三宅莊次郎	
監事	中田 日達	
監事	林 誠一	
監事	小野 善吉	
評議員	左ノ如シ (姓名イロハ順)	
今成 乾隨	井村 恂也	市橋 龜藏
市橋 馬藏	岩佐 春治	市川 榮吉
猪野重之助	林 誠一	橋本 善助

小野 善吉	吉川平兵衛	高 剛三郎
染谷 要作	中田 日達	中村 祐七
中村初太郎	村上 貞藏	宇垣卯三郎
野口 義禪	野阪 孫作	久城茂太郎
山根 顯道	山本熊之助	福原豐次郎
小林傳次郎	秋山嘉兵衛	笹川 眞應
清瀬 貞雄	京藤長右衛門	三宅 六藏
三宅莊次郎	鈴木 金藏	杉野伊兵衛
須山茂三郎		
石川 貫一	入江 善平	林太嘉一郎
渡邊 爲頼	片岡 脩德	藥師寺卯兵衛
齋藤自治夫	佐久間東吉郎	鴫田 友七

(已下評議員就任照會中)
(通計四拾貳名)
明治四十年一月二十日

教學財團

教學財團基金申込表 (第三回)

金二千二百六十圓也	東京淺草	本立寺	金三十圓	上太田法雲寺住職	鶴岡 惟中
金六十圓	東京四谷法恩寺住職	森本 眞良	金二十五圓	全 正立寺住職	柳生 肇叔
金百圓	東京難所ヶ谷本染寺住職	田久保日城	金二十圓	全 能泉寺代理人	成川 寅吉
金百拾圓	千葉縣姊ヶ崎妙經寺住職	山本 日悟	金十五圓	全 大澤寺住職	若江 乾英
金三十五圓	全 長遠寺住職	鈴木 純智	金五圓	全 柴名 蓮華寺住職	島本 順祐
金二十圓	全 圓能寺住職	佐野 泰晋	金五圓	全 榎神房眞福寺住職	齊藤 義賢
金二十圓	全 寶藏寺住職	鈴木 日王	金五圓	全 小中 正圓寺住職	同 榮應
金三十圓	全 行傳寺住職	加藤 會圓	金三十圓	全 土氣 本壽寺住職	同 會意
金二十五圓	全 長圓寺住職	環飯 志善	金二十五圓	全 高津戸本休寺住職	金阪 教隆
金三十圓	全 福庄寺住職	渡邊 乾航	金三十圓	全 大木戸善徳寺住職	内山 是眞
金十圓	全 妙教寺住職	全 人	金二十圓	全 餅木 法輪寺住職	金田 智哲
金十圓	全 本成寺住職	門倉 玄要	金二十圓	全 金谷 法泉寺住職	同 泰龍
金七圓	全 番田寺住職	木村 乾中	金十五圓	全 平澤 本榮寺住職	同 寛俊
金七圓五十錢	全 藥王寺住職	石橋 端嚴	金十五圓	全 荳野 正法寺住職	同 日基
金五圓	全 法光寺住職	全 人	金二十圓	全 永田 光昌寺住職	同 日導
金十七圓	全 內長谷妙照寺住職	前田 孝信	金百圓	全 全 導 什 寺	同 人
金三十圓	全 櫻谷 妙圓寺住職	有田 宏道	金五圓	全 全 圓 光 坊	同 人
金二十圓	全 中里 圓頓寺住職	横山 賢明	金三圓五十錢	全 全 駒込 正福寺	同 人
金五圓	全 福島 常福寺住職	小川 恭峻	金七圓	全 全 全 東榮寺住職	同 人
金十圓	全 本納 實相坊	中村 体靜	金四十圓	全 全 全 砂田 妙照寺住職	同 人
金十五圓	全 吉井 光明寺住職	米倉 義明	金十圓	全 全 全 全 最光寺	同 人
金二十圓	全 東國吉妙照寺住職	金阪 學信	金六圓	全 全 全 全 三願寺	同 人
金二圓	全 高倉 高福寺住職	阿部 義貫	金一圓	全 全 全 全 全 全	同 人

金二圓 長岡徳太郎
 金壹圓 儀俄 テイ
 全 間宮 元照
 全 間宮 トモ
 全 安宅仁太郎
 全 小野 敦孝
 全 小野 ミネ

第十一教區

靜岡縣北松野妙松寺檀家
 金拾圓 田中 秀穂
 全 宇佐美千代吉
 全 白井 多作
 全 白井百太郎
 全 小川 京作
 全 高田由太郎
 全 吉田豊太郎
 全 金貳圓五十錢 朝比奈松藏
 全 石川徳太郎
 全 田中 市松
 全 田中 連作
 全 久保田乙吉
 全 金壹圓五十錢 深澤 茂作
 全 石川 運作
 全 金壹圓五十錢 高岡松次郎

鳥川 ナミ
 池田 クニ
 中島 元道
 間宮 トヲ
 中市 陸造
 小野 トク
 西國 キク

(第二回)
 全 小川友次郎
 全 望月 宗吉
 全 白井繁太郎
 全 白井竹次郎
 全 小川 源十
 全 田中龜太郎
 全 深澤 瀧十
 全 淺比奈吉太郎
 全 鹽川久太郎
 全 白井 治平
 全 久保田子之作
 全 稻葉茂三郎
 全 小川 善一
 全 高岡 幸作
 全 石川吉太郎

全 宇佐美傳四郎
 全 望月 金作
 全 鹽川 徳藏
 全 望月榮次郎
 全 小川 清作
 全 佐野 善助
 全 全 豊吉
 全 木内 純作
 全 望月 重吉
 全 川原 虎吉
 全 深澤 種藏
 全 天野 梅吉
 全 小林 和助
 全 久保田廣作
 全 久保田喜十
 全 小池 由松
 全 宇佐美幸作
 全 石川才次郎
 全 高岡 さみ
 全 石川松次郎
 全 高岡 久作
 全 靜岡縣見付町玄妙寺檀家
 全 白井政吉母
 全 北川彌三松
 全 大塚 仙吉

全 吉田 喜作
 全 田下 藤吉
 全 望月 米吉
 全 石川 兼吉
 全 望月 猪作
 全 朝比奈友吉
 全 長田 濱吉
 全 望月 國藏
 全 錦織 もん
 全 川原 源吉
 全 小澤安太郎
 全 天野 和吉
 全 宇佐美治作
 全 小池彦治郎
 全 小池猪三郎
 全 稻葉伊三郎
 全 渡邊富士太郎
 全 宇佐美梅吉
 全 宇佐美源吉
 全 天野 米吉

金二圓 原川 榮作
 金一圓五十錢 山下政次郎
 金一圓 上村平治郎
 金五十圓 加藤 龜吉
 金五十圓 本郷 淺吉
 金三十錢 高木鎮太郎
 金三十錢 筒井 タキ
 金拾五圓 服部 彌八
 金拾五圓 服部 洋平
 金拾五圓 服部 泰吉
 金拾圓 木村 爲吉
 金七圓五十錢 倉橋 源平
 金五圓 田村 彌平
 全 安達 彌作
 全 戸田 大助
 全 内藤 ヨネ
 全 上島萬次郎
 全 神谷 由平
 全 櫻井 祥造
 全 加治 保衛
 全 田中 松吉
 全 長尾 清江

全 濱口 伊平
 全 安田 義正
 全 田中 徳藏
 全 保科 爲吉
 全 永野長太郎
 全 加藤 安吉
 全 綾部平之助
 全 服部 源助
 全 伊海 龜吉
 全 神田徳四郎
 全 田村 仙作
 全 豐田 儀作
 全 田中 平助
 全 山本 立藏
 全 大小島嘉三郎
 全 田中幾太郎
 全 鈴木熊次郎
 全 井川 平吉
 全 菅沼 和市
 全 鳥居 治一
 全 小谷 勤助

金四圓五拾錢 爲吉
金參圓 太七

倉橋 久五郎
瀧崎 久五郎
加藤 熊次郎
小島 善太郎
田名 瀬つよ
疋田 ジュン
飯田 健之助
山本 熊五郎
倉木 榮作
稻吉 清右衛門
曾田 勇助
山本 辰吉
山本 惣兵衛
鈴木 助右衛門
佐原 國作
佐原 徳衛
佐原 富作
豊田 五平
豊田 要藏
黒川 眞太郎
伊藤 榮吉
織田 龜治郎
市田 道太郎
越知 喜三郎

金二圓 橫田 常次郎
金一圓五十錢 小竹 虎吉
金一圓 鈴木 覺藏

安達 平吉
榎本 又吉
鈴木 豊七
長尾 謙三
波多野 義次
小島 磯吉
杉江 ユキ
山口 勘兵衛
廣田 淺吉
村田 經三郎
熊本 甚太郎
佐原 三吉
山本 駒藏
小竹 徳右衛門
佐原 清次郎
佐原 竹次郎
佐原 音平
山本 定八
安達 岩藏
安達 重吉
鈴木 富藏
織田 彌市
市川 トミ
伊藤 彌七
山本 友吉

小島 要四郎
山本 勘藏
藤平 榮次郎
竹本 源三郎
古本 幸七
竹本 仙太郎
藤本 彌五七
藤平 久松
佐原 久松
山本 丈吉
伊藤 喜代松
豊田 兵作
加藤 六三郎
平山 常吉
岡 松次
村上 芳藏
廣中 ハル
山本 才五郎
石渡 儀平
山本 源治
山本 友吉
山本 徳藏
山本 市作
山本 眞藏
山本 民藏

柴山 熊次郎
鈴木 榮作
加藤 榮助
片山 才吉
中島 善藏
清水 仙之助
中村 勘吉
河合 留吉
篠原 平四郎
菊地 トキ
倉橋 重助
中村 榮次郎
永野 龜吉
井上 重次郎
内山 九平次
土屋 金藏
佐原 源四郎
平山 季人
見玉 安次郎
彦坂 伊之作
島田 榮作
山本 源作
藤井 平三郎
宮本 徳次郎
柴田 助五郎

金壹圓

山本 音吉
山本 増吉
山本 初平
伊藤 松太郎
鈴木 文四郎
佐原 源吉
石渡 常造
大久保 彌平
永田 元太郎
鈴木 竹三
星野 音吉
小島 原兵衛
内藤 保治
杉山 ヨネ
田中 俊三九
猪股 充
鈴木 千代藏
高橋 嘉吉
杉本 玉作
小島 龜吉
鈴木 次三郎
豊阪 七三郎
加賀山 延吉
齋藤 與曾吉
山本 トモ

金壹圓

山本 吉兵衛
酒井 清次
山本 源作
小竹 松右衛門
鈴木 清兵衛
加藤 留吉
石渡 松太郎
豊田 角吉
鈴木 増造
丸地 菊次
戸田 京
田中 徳兵衛
本多 ヲウ
小林 昌治郎
重松 タツ
鈴木 多一
黒田 キミ
鈴木 忠作
小島 作藏
小島 良作
川村 金平
加藤 又藏
戸田 ナヲ
藤田 勇作
倉橋 兎藤次

金壹圓

柴山 熊次郎
鈴木 榮作
加藤 榮助
片山 才吉
中島 善藏
清水 仙之助
中村 勘吉
河合 留吉
篠原 平四郎
菊地 トキ
倉橋 重助
中村 榮次郎
永野 龜吉
井上 重次郎
内山 九平次
土屋 金藏
佐原 源四郎
平山 季人
見玉 安次郎
彦坂 伊之作
島田 榮作
山本 源作
藤井 平三郎
宮本 徳次郎
柴田 助五郎

金五圓

菅沼 彦右衛門
川口 金之助
藤田 清吉
曾田 梅作
尾崎 龜松
石渡 彌助
小林 梓治
多崎 兒太郎
高田 傳四郎
杉本 榮藏
杉浦 幾太郎
木村 カノ
根木 萬作
日高 鶴藏
西山 峯太郎
鈴木 富藏
黒川 猶吉
黒川 喜十

金六十錢 全 法道寺檀家
 金二十錢 全
 金十錢 全
 金十錢 全
 金六錢 全 慈雲院檀家
 全 大垣常隆寺檀家
 金六十錢 全
 金五十錢 全
 全
 全
 金三十錢 全
 全
 金二十錢 全
 全
 金十錢 全
 全
 金六十錢 全
 金三十錢 全
 金二十錢 全
 金十錢 全
 金八錢 全

下 村京次郎
 伊 藤源三郎
 石 田吉三郎
 清 水市三郎
 半 杉市三郎
 神 谷忠七郎
 後 藤光三郎
 安 藤秀三郎
 奧 田休左衛門
 淺 井俊貞
 尾 崎謙三郎
 鹽 津久次郎
 西 藤三之助
 森 忠次郎
 石 川義章
 松 野利直
 駒 井正能
 伊 丹榮二郎
 伊 丹千代松
 伊 丹長三郎
 成 田大郎

金四錢 全
 金拾圓 (第一回)上總土氣善勝寺住職小川日園作
 金六圓 (完)全沙田景光寺兼務 笹本日基
 金壹圓 (完)全置場三願寺 秋葉純一
 金四圓 (第一回)全小中覺行寺住職 吉田俊學
 金貳拾圓 全 永田光昌寺住職 朽木日導
 金壹圓 全 永田正福寺兼務 全
 金壹圓 全 永田導什寺 全
 金七十錢 全 永田圓光坊 全
 金壹圓四拾錢 全 全相野谷妙常寺住職中村 休祐
 金壹圓四拾錢 全 全大竹本泰寺住職 角川 泰碩
 金壹圓五拾錢 全 全玉野安照寺住職 石渡 存中
 金九拾參錢 全 全打越立源寺代 石井 謙十郎
 金拾圓 (第一回)全 同市妙行寺住職 武藤 顯誠
 金壹圓 全 同市 法道 顯誠
 金參拾錢 全 同市慈雲院任職 佐々木 英春
 金參拾錢 全 大垣常隆寺任職 栗田 日滿
 金六拾錢 全 員部實成寺任職 水谷 大雲

右領取候也

明治四十年一月

教學財團